

プロジェクト研究を終えて

永田邦和
(プロジェクト研究担当)

「プロジェクト研究」は、地域の問題を発見し、フィールド調査に基づいて政策提言を行う授業である。当初は、受講生の専門分野に関係なく、グループによるフィールドワークを行っていた。しかし、博士後期課程の期間は、各自の専門分野の重要な先行研究を理解し、必要な分析手法を身につけるための重要な期間であることを踏まえると、当初のプロジェクト研究は、受講生にとって負担の重い授業であった。

最近、グループによるフィールドワークを行わず、各自の研究成果（将来、博士論文の一部になるもの）を発表し、統一の視点から議論する形を取っている。しかし、今年度は受講生が7名（1年生6名、2年生1名）と多かったために、3グループに分けることにした。研究手法や分析対象、受講生の関心を踏まえて、文献班とインタビュー班、金融班に分けることにした。

文献班は、文献を丹念に読み解く研究手法を利用している受講生のグループである。文献班の専門分野は文学と政治学であるが、それぞれの分野での文献の読み方を共有することで、新しい視点を身に付けることを目指している。インタビュー班は、中国人留学生へのインタビューから、来日前後の日本人感の変化を分析しているが、定性的分析と統計的手法という2つの手法を用いることで、多角的な視点から考察している。金融班は、庶民金融の古い形態であるタノモシと、最新の手法であるクラウドファンディングを比較することで、庶民金融の将来像を模索している。

今回の報告会のテーマは、「転換は変容になるかー過去・現在・未来と国家・民間・個人ー」である。各グループの共通のキーワードは、研究対象の「転換」である。それは、大きな転換もあれば、緩やかな転換もあり、転換しているように

見えるが、現実には転換していないこともある。さらに、転換は過去の出来事だけでなく、現在進行しているものや、将来起こるものもある。なお、分析対象が転換したからといって、その本質が変化していない可能性がある。そこで、今年度の報告会では、各グループの研究成果を「転換は変容になるか」という視点から議論することにした。

今年度の指導は、永田（地域政策コース）、石田智子准教授（文化政策コース）、萩野誠教授（島嶼政策コース）、熊華磊特任助教が担当した。プロジェクト研究において熊助教は、授業内外で親身になって指導してくれた。受講生だけでなく、担当教員にとっても心強い存在であった。

報告会でのコメンテーターをお引き受けいただいた多田蔵人先生（法文学部人文学科准教授）と尾崎由美子先生（グローバルセンター・スタディ・ジャパン・プログラム講師）にも厚く御礼を申し上げたい。お二人のコメントは非常に有益なものであり、受講生は、新たな視点から研究手法やテーマを再検討することができた。

私事であるが、鹿児島大学での最後の2年間にプロジェクト研究を担当できたことにも感謝したい。私を含め、多くの先生が厳しいコメントをしたが、受講生は、それに応えようと一生懸命に取り組んでくれた。受講生の努力により、この2年間、有意義な報告会を開催できた。未熟ながらも真摯に研究に取り組んでいる彼等・彼女達の今後の活躍を遠く離れた地よりお祈りしたい。

永田 邦和（ながた くにかず）

鹿児島大学総合教育機構共通教育センター教授。大学院人文社会科学研究科地域政策科学専攻「金融システム論」担当。

目 次

巻頭文

プロジェクト研究を終えて	永田邦和	i
--------------	------	---

報告

「スプートニクの恋人」論	周 倩	1
--------------	-----	---

戦後における中国共産党の天皇イメージの転換 —国交正常化までの『人民日報』天皇記事の検証を中心に—	蔣奇武	7
--	-----	---

鹿児島市の空襲記録に関する一考察 —文献記録を中心に	江 山	17
-------------------------------	-----	----

来日前後の日本人イメージの転換 —鹿児島大学中国人留学生を中心に—	趙 琳・金子信一	23
--------------------------------------	----------	----

庶民金融の転換—タノモシとクラウドファンディング—	江 駿・竹下友章	33
---------------------------	----------	----

平成29年度プロジェクト研究概要	熊 華磊	49
------------------	------	----

プロジェクト研究を振り返って		55
----------------	--	----

「スプートニクの恋人」論

人文社会科学研究科 地域政策科学専攻 文化政策コース 2年
周 倩

目次

1. はじめに
2. すみれの物語
3. すみれの失踪
4. すみれの書き残した文章
5. もう一つの物語
6. 終わり

1. はじめに

「スプートニクの恋人」（講談社 1999年4月）は「これはすみれの物語であり、ぼくの物語ではない」という一文とともに、小説家を目指すすみれが、日本生まれで韓国籍の既婚女性ミュウに恋をする物語で、すみれの恋愛の前後における、外見の変化、内面の動揺、実体の消失などをメインラインにしている。すみれと「似た同士」である「ぼく」が自らの意志に従って、ギリシャへ失踪したすみれを探しに行き、その過程で、ミュウの身に起こった「不思議な事件」をすみれの残した小説から知ることになる。これは物語の中の物語というサブラインとなっている。

発表时期的に言えば、「スプートニクの恋人」は地下鉄サリン事件の被害者を取材対象とした「アンダーグラウンド」とオウム真理教の元信者を取材対象とした「約束された場所で」及び、地震をモチーフとする短編集「神の子どもたちはみな踊る」という村上春樹の作品史において「デタッチメント」から「コミットメント」への大きな「転換」が迎えられる時期に発表された作品であるため、よく95年の問題¹と関連付けて読まれてきた。

例えば、黒古和夫²は『「スプートニクの恋人」は個

の内部を「掘り下げる」ことだけに終始して、作家自身や主人公＝語り手が生きる現実とその掘削の刃先が届いていない作品であり、作家の言う「コミットメント」の意味から、この作品は「明らかに後退してしまっていた」と批判している。

一方、黒古和夫のような批判に反して、積極的な評価も見られる。大竹昭子³は「地下鉄サリン事件の被害者を取材した『アンダーグラウンド』を書き、「こちら側」と接触した」村上春樹は、「作家として「あちら側」と関わるこの意味と必然をここで改めて自問自答し」、「かなわぬ恋をして血を流し、初めて物語世界に迎え入れられたすみれのように、新たな意識で小説を書いていこうとする作者の意志をそこに感じとった」と述べた。芳川泰久⁴は「『麻原の荒唐無稽な物語を放逐できる』浄化するための新たな物語の構築作業であって、『スプートニクの恋人』はそのような「洗礼＝浄化」のあとに書かれているのであり」、すみれの〈帰還〉は「小説を書くことのメタファーである」とともに、「物語に対するこの小説家の新たな変位に見合う貴重な刻印」であると評価した。

また、柘植光彦⁵は「九十五年以後の作品群は、全体的を「地震後作品群」というふうに考えてテーマの進展を追うのが、一つの有効な読み方だ」と述べている。そして、村上春樹の作風が大きく転換するプロセスを明らかにするため、「スプートニクの恋人」を取

1 1995年1月17日の阪神淡路大震災と同年3月20日の地下鉄サリン事件を指す。

2 黒古和夫「『コミットメント』の行方」『村上春樹——「喪失」の物語から「転換」の物語へ』勉誠出版 2007年 p239。

3 大竹昭子「自己を遠望する意識——『スプートニクの恋人』村上春樹」『新潮』1999年7月号 p236-237。

4 芳川泰久「『帰還』と『洗礼』——物語のジャンク化に抗して」『ユリイカ』2000年3月号 p204-209。

5 柘植光彦「円環/他界/メディア」『村上春樹スタディーズ05』若草書房 1999年10月 p31。

6 前掲9に同じ。

り上げた。

この作品についての先行研究は、上述のように作品の外部に目を向ける論が多い。しかし、作品そのものを論じるものはごくわずかである。また、この作品には一人称小説としての複雑さが現れているが、これについてはまだ十分には論じられていない。

本稿では、作品の内部に注目し、語り手の構造を分析しつつ、「スプートニクの恋人」はメタフィクションの構造を持つ「ぼく」の自己言及の物語であることを明らかにする。

2. すみれの物語

先行研究において、「すみれがこの作品の中心に描かれている」という指摘がある。そして、「スプートニクの恋人」は「これはすみれの物語であり、ぼくの物語ではない」という語り手「ぼく」の宣言によって、すみれが焦点人物になる。すみれの物語は一人称「ぼく」によって語られている。

22歳の春にすみれは生れて初めて恋に落ちた。広大な平原をまっすぐ突き進む滝巻のような激しい恋だった。…（中略）…恋に落ちた相手はすみれより17歳年上で、結婚していた。さらに付け加えるなら、女性だった。それがすべてのものごとが始まった場所であり、（ほとんど）すべてのものごとが終わった場所だった。

「スプートニクの恋人」は、このように書き出されている。ここには、語り手の躊躇うことなく断言的な語り口によって、その後に「スプートニクの恋人」全篇にわたって起こりうる事象が、凝縮されて予言されていると言っても過言ではないだろう。つまり、語り手は焦点人物であるすみれが既婚の女性に恋をした話を物語の大筋として示すのである。

すみれはそのころ職業的作家になるために文字どおり悪戦苦闘していた。この世界に人生の選択肢がどれほど数多く存在しようとも、小説家になる以外に自分の進むべき道はない。その決意は千歳の岩の

ように堅く、妥協の余地のないものだった。彼女という存在と、文学的信念とのあいだには、髪の毛一本入りこむすきまもなかった。

「そのころ」という過去の時間を示す言葉は、語り手「ぼく」が過去に発生したすみれの物語を現在回想の形で語っている設定であることを示している。「ぼく」は作品の語り手でありながら、「傍観者」として設定され、局外からすみれの恋物語を提示する役割を担わされているのである。「ぼく」の語りから、すみれが小説家になろうとする情熱や頑固さが読み取れる。

読者はこの作品を語り手「ぼく」の提示したすみれの恋物語に沿って読んでいくことで、知らず知らずのうちに、その物語に、「ぼく」が加えた判断や感想を受け入れることになる。物語の第三者的性格は物語の展開につれて次第に薄れ、「ぼく」の主観が強く打ち出されていく形となっている。

彼女はテーブルの上に身を乗り出した。「長い話だけど、聞きたい？」

「……いくら長くてもかまわない、話せばいい。本筋の他に、序曲と〈妖精の踊り〉がついているのなら、それもいっしょでいい」

そして彼女は話し始めた。従妹の結婚式のこと、ミュウと食べた青山のレストランのランチのこと。確かにずいぶん長い話だった。

これは、二章の結末部で、すみれが「ぼく」に向けて、彼女とミュウの話をする場面である。この場面から、語り手「ぼく」によって提示したすみれの物語は、実際にすみれから聞いた話であることが分かる。

「話が前後するけど、……」（第一章）や「すみれとミュウの出会いに話を戻そう」（第一章）とすみれの話をしている間に、別の話も挿入しているという語り手の語り振りから、すみれの物語は時系列に即して語られている訳ではなく、すみれから聞いた話に語り手「ぼく」が操作を加えていることが窺える。読者の前に提示されているすみれの物語は語り手「ぼく」の意図、願望に従って再加工されたものである。

つまり、語り手としての「ぼく」は、すみれの恋物語の世界内にいる人物とは異なる物語外の世界にいる。この語り手の位置によって、物語内と物語外という時空間に枠がつけられているのである。この作品においては、現在の語り手としての「ぼく」は読者に向けてすみれの恋物語を語るという姿勢をとっているのである。

以上、語り手の語りから示されるように、すみれの物語はすみれから聞いた話を「ぼく」が後で操作を加え、再構成したものである。そして、語り手でありながら、「ぼく」はすみれの恋物語に一登場人物として現れる。こうした人称視点における位置変化は、物語世界内と物語世界外の境界線を曖昧にする効果を持っている。

3. すみれの失踪

前節で指摘したように、焦点人物であるすみれの恋物語は時系列に即して提示されているわけではない。この作品において、「ぼく」の語りから、ミュウと出会った際のすみれは、大学中退後2年少したった頃で、22歳の春を迎えていたことがわかる。小説内の現在時は春に始まり、やがて冬が来て、すみれと「ぼく」はそれぞれ23回目と25回目の誕生日を迎え、年が明け、新しい学年が始まる一年間である。

ただし、この作品には語り手による作中物語の再構成が織り込まれているため、物語の時間と空間は章ごとに、さらには章の内部においても、かなり断片化されている。作品の前半において、語り手「ぼく」は回想の形で語りながら、大量の会話や描写を交え、すみれの恋物語をリアル再現している。

語り手としての「ぼく」は、物語の早い段階から、自分の存在とその物語行為を読者に強く意識させているのである。しかし、すみれの失踪事件がきっかけとなって、語り手としての「ぼく」の存在が希薄になるが、登場人物としての「ぼく」は相変わらず自ら物語の中心にあって、物語を展開させていく。

すみれの事件が起こると、「ぼく」は準備を素早く整えて、急遽ギリシャに向う。つまり、すみれの失踪がきっかけに、「ぼく」は語り手を介さず、当事者と

して、直接物語に関与し、物語の更なる展開を促す役割を果たす人物となる。こうした語り手の存在感を弱化することは、読者の関心をもつばら語られる内容に仕向けるのに効果的であると同時に、一人称「ぼく」の視点はリアリティを生み出し、過去と現在の距離を巧妙に縮小する効果を持つ。

すみれが姿を消した理由について、「ぼく」は次のように仮説を立てて解釈している。

ぼくは思い切ってひとつの仮説を立ててみる。

すみれはあちら側に行ったのだ。

それでいろんなことの説明はつく。鏡を抜けて、すみれはあちらに行ってしまったのだ。こちら側のミュウが彼女を受け入れることができない以上、それはむしろ当然の成り行きではないか。

これはすみれの書き残した文章を読み終わった後、「ぼく」が仮説を立てて得た結論である。確かに、「ぼく」の立てた仮説に沿って読んでいけば、一応筋は通るが、それは、あくまで「ぼく」の仮説である。そして、後の物語の進行から、この仮説の成立を検証できる証言は一切提示されていないことがわかる。にもかかわらず後の物語の進行も「ぼく」の仮説に基づいて、展開されていくのである。

ぼくはもう一度〈仮説〉に立ち戻ってみる。その仮説をもう一歩前に押し出してみる。すみれはどこかにうまく出口をみつけたのだ、ぼくは単純にそう仮定してみる。それがどのような種類の出口であったのか、すみれがどのようにしてそれを見つけたのか、そこまでは知る由もない。

ここで、注目したいのは、「ぼく」が自分の立てた仮説に基づいて、さらに彼女が「どこかにうまく出口を見つけた」と「単純にそう仮定してみる」という行為である。ここで疑問なのは、「ぼく」の仮説が小説中の現実根拠を持つ内容に基づいたものかどうかという点である。それを検証するために、すみれの書き残した文章自体がこの小説中において虚構として設定されたものか否かを問う必要がある。

4. すみれの書き残した文章

「文章2」は主にミュウの観覧車の話が描かれる。これは作品の中で何度か提起された14年前にミュウの身に起こった謎めいた事件で、具体的にどのような事件が起こったのかはこれまで明確には描かれてこなかったものである。

このミュウの観覧車の話は、二人が「ブルゴーニュの村で語ったもの」を指すのであろう。それはすみれが「ぼく」に送った手紙の中に、「二人がブルゴーニュに向かった」と書かれていることからわかる。すみれの失踪について、「ぼく」とミュウには次のような対話がある。

「いったいどこから話し始めればいいのかしら」

ぼくは言った。「ミラノからパリに行って、鉄道でブルゴーニュについたところまでは、すみれからの手紙で知っている。すみれとあなたは、ブルゴーニュの村であなたのお友達の荘園のように大きな家に滞在した」

「じゃあ、そこから始めましょう」とミュウは言った。

ミュウは「ぼく」に向けてブルゴーニュの村でのことを語り始めた。しかし、ここで注目したいのは、ミュウの語った話に沿って読めば、「14年前にあのことが起こって以来、わたしはこの世界の誰とも身体を交わらせることができないの。それはどこか別のところですでに決められてしまったことなの」と簡単にしか触れられていない点である。つまり、ミュウが語った内容はすみれの文章の中の極々一部でしかないのである。

彼女は語り始める。少しずつ。ひとかけらずつ。

…（中略）…わたしは語り手として、それらを注意深く拾い集めていかなくてはならない。

下線部の表現から、そこに未熟な小説家であるすみれの操作が入っていることが分かる。この観覧車の話は、ミュウから聞いたことを後に、すみれが物語の形

で提示している部分である。しかも、それはすみれの書いた「文章2」を通してのみ了解可能な内容である。

ミュウの身に起こった奇妙な事件は小説中で何回か提示されているが、それは「いったいどういうことなのか？」と読者はその時点で、すみれと同じ立場に置かれて、その謎めいた事件に対する疑問を抱えながら読み進み、語り手「ぼく」の語りに従って、すみれの物語世界に入りこんでいく。文章に描かれたミュウの話は、未熟な小説家であるすみれが自らの創作過程をそこに織り込んだ虚構の物語であると言えよう。

次節では、こうした認識のもとに、「ぼく」の仮説を振り返り、「スプートニクの恋人」にはもう一つの物語があることを論じたい。

5. もう一つの物語

前節で論じたように、ミュウの観覧車の話は、ミュウの話に基づく部分があるかもしれないが、基本的にはすみれの作り上げたフィクションであることが明らかである。つまり、「ぼく」の仮説は虚構の内容に基づいて立てられたことになる。以後の物語の内容は、「ぼく」の仮説に沿って展開されているため、読者は語り手「ぼく」の語りによって、純然たる虚構世界に導かれるのである。

語り手「ぼく」が作り上げたすみれの物語、すみれの手紙、すみれの書いた文章、その中にミュウの物語。「スプートニクの恋人」はこうした回想物語・書簡・小説（すみれの書いた文章）という錯綜した多様な表現ジャンルと重層構造が複雑に組み合わせられた作品であると言える。

疑問なのは、語り手「ぼく」はなぜ多様な表現形式と多重の構造を駆使して、すみれの物語を語るのだろうかということである。

ぼくが自分自身について語るとき、そこで語られるぼくは必然的に、語り手としてのぼくによって・・・（中略）・・・取捨選択され、規定され、切り取られていることになる。とすればそこに語られている「ぼく」の姿にどれほどの客観的現実があるのだろうか？ぼくにはそれが非常に気にかかる。

語り手「ぼく」はすみれの物語を提示すると同時に、さり気なく自分のことも物語に織り込んでいる。これは語り手としての「ぼく」は自分が「誰であるか」を説明する場面である。

「ぼくという以外の存在について、少しでも多く客観的に事実を知りたく、その具体的なやり方は次のように打ち明けられている。

そのような個別的な事柄や人物が自分の中にどのような位置を占めるかという分布なり、或いはそれを含んだ自己のバランスの取り方なりを通して、自分という人間存在をできるだけ客観的に把握していきたいと思った。

「ぼく」がすみれの物語を語る理由はここにあると言えよう。他者として造型されたすみれを語ることは、自分を客観的に把握しようとする「ぼく」の物語行為の本意であるだろう。

作品の終り近くに、語り手「ぼく」がギリシャの島で起こったことを頭の中に再現し、次のような話が語られている。

椅子の中でしばらく目を閉じ、それから目を開ける。…（中略）…ぼくはなにかを考えようとし、それからなにも考えまいとする。しかしそれらの間には実際にはどれほどの違いもない。ものごととものごとのあいだに、そして存在するものと存在しないものとのあいだに、ぼくには明瞭な違いを見いだすことができない。

注意したいのは、「ぼく」は過去の情景を回想しながら、「存在するものと存在しないものあいだに」明確な区別をつけることができない点である。ギリシャの島で、どんなことが起こったか起こっていないか、或いはもともとすべてが存在していないかもしれない、という記憶（存在するもの）と虚構（存在しないもの）に対して、「ぼく」には判断しえなくなるのである。ここで、当事者としてリアルに描かれてきた「ぼく」の体験であるにもかかわらず、実のところこれらのすべてを「ぼく」の虚構へと収斂していこうとする

語り手の姿が浮かび上がってくる。

ベルはなかなか鳴り出さない。（中略）しかしぼくは急がない、もうとくに急ぐ必要はないのだ。ぼくには準備ができています。ぼくはどこにでも行くことができます。

これは物語の最後の場面である。注意したいのは、物語はすみれの恋物語から始まり、最後には「ぼく」の話に帰結する点である。この独白は「ぼく」がある種の落ち着いたようなものを手に入れ、これからどのような姿勢あるいは行動をとるべきかという認識を獲得した様子を見せている。

そして、物語の最後になると、語り手としての「ぼく」が前面に押し出されてくる。語り手のこうした位置取りの変化によって、物語世界に没入する読者が、物語る現在の時点に引き戻されてくるのである。

6. まとめ

以上、語り手の構造を分析することによって、すみれの物語は語り手「ぼく」がすみれから聞いた話を後で、再構成したものであることを明らかにした。

すみれの書いた文章はすみれの手による創作物であるため、「ぼく」の仮説もこうした虚構の上に立てられたフィクションということになる。そういう意味で、「スプートニクの恋人」は「ぼく」の語りによって仮構される物語中に他者であるすみれの語りが含まれるという複雑な構造の物語となっている。

これらの虚構作用が複雑に絡まり合うことによって、「スプートニクの恋人」は、虚構内虚構というメタフィクション小説の構造を持つ「ぼく」の自己言及の物語であると言える。

参考文献

村上春樹研究会編『村上春樹作品研究事典』鼎書房 2001年

千田洋幸 宇佐美毅『村上春樹と一九九〇年代』おうふう 2012年 p299

黒古一夫「「コミットメント」の行方」『村上春樹——「喪失」の物語から「転換」の物語へ』 勉誠出版
2007年 p239

大竹昭子「自己を遠望する意識——『スプートニクの恋人』村上春樹」『新潮』1999年7月号 p236-p237

芳川泰久「「帰還」と「洗礼」——物語のジャンク化に抗して」『ユリイカ』2000年3月号 p204-p209

柘植光彦「円環/他界/メディア」『村上春樹スタディーズ05』 若草書房 1999年10月 p31

馬場重行「〈語りの力〉への信頼——村上春樹「スプートニクの恋人」のために」『菊地靖彦教授追悼論集 人・ことば・文学』 所収、鼎書房 2002年11月

加藤典洋『村上春樹 イエローページ (3)』 幻冬舎
2009年10月

宇佐美毅「非現実的な現実——村上春樹作品の〈二つの世界〉をめぐって」『文学』2007年1月 p194-p207

戦後における中国共産党の天皇イメージの転換

—国交正常化までの『人民日報』天皇記事の検証を中心に—

人文社会科学研究科 地域政策科学専攻 地域政策コース1年
蒋奇武

1. 序 論

1.1 研究の背景

2016年8月8日天皇自らが「お言葉」を発したことを契機として、「生前退位」についての議論が始まり、2017年6月9日、譲位を可能とする特例法が成立し、12月1日「皇室会議」を宮内庁で開いた。会議の意見を踏まえ、政府は8日の閣議で、天皇の退位の日を2019年4月30日と定めた政令を決定した。

「生前退位」問題に関する活発な議論に対し、中国共産党の機関紙『人民日報』も無視できず、天皇自らが「お言葉」を発した翌日に、21面で「日本天皇に“生前退位”の意向があり¹⁾という見出しで、世論調査や退位に関する法制化の手続きなどの事実関係を伝え、うえて、「生前退位は日本近代天皇制への最大挑戦」という表現にとどめ、論評無しで速報した。中国外務省は日本の新聞社の取材に「日本の内政に関することであり、評論はしない」とコメントを避けた²⁾。

なお、天皇が2019年4月末に退位すると固まったことについて、中国外務省は1日の記者会見で、「日本の内政であり、評価は避ける」と述べた。しかし、そのうえで、天皇について「1992年に訪中したほか、多くの中国共産党や国家の指導者と会談し、中日関係の発展に積極的な貢献をした」と語った³⁾。

このように、天皇の生前退位を巡って、中国は議論の展開を控え目にしたが、称揚的な評価をした。中国は、なぜ天皇に関して、このような慎重な姿勢を取っ

たか。中国⁴⁾にとって、対日政策における天皇の位置づけはどのようなものであるか、また、この位置づけに基づいて、どんな天皇イメージ（天皇評価）を発していたのだろうか。

まず、この問題についてのこれまでの研究を振り返ってみよう。

1.2 先行研究の検討

中国では天皇・天皇制問題を中心に論じたものが90年代以降ようやく登場するようになったものの、基本的には慎重なものが多い⁵⁾。一方、日本においては、中国共産党の天皇対策そのものを明らかにするというよりは、一つの中国イメージを作るため、あるいは自らの中国論を展開する手段として中国の天皇認識を取り上げるといった傾向が顕著である⁶⁾。感情的なフィルター⁷⁾を用いて、特定の中国イメージを作り出すことに主眼がおかれているのである。

また、中国の対日政策や中日関係に関する研究⁸⁾は中日双方に多数存在しているが、その対日政策や中日関係における天皇の位置づけに関する研究、そしてその位置づけを基に発した天皇イメージの研究はほとんどなされていない。

一国の対外政策は歴史的な産物であることは言うま

1 賈文婷「日本天皇有意“生前退位”」『人民日報』2016年8月9日。

2 「天皇陛下お気持ち 海外から高い関心 生前退位に理解多く」『毎日新聞』2016年8月8日。

3 永井央紀「『天皇陛下は日中関係発展に貢献』退位日確定で中国外務省」『日本経済新聞』2017年12月1日。

4 本稿では、1949年中華人民共和国建国を境に、その前は、政権をとっていなかったため、中国共産党と中国を区別し、その後は、中国共産党が唯一の与党であるため、中国共産党＝中国とする。

5 解曉東（2008）「近年来我国日本天皇制研究述評」『渤海大学学报（哲学社会科学版）』30（1）、55-59頁。

6 城山英巳（2009）『中国共産党「天皇工作」秘録』文藝春秋。

7 伊藤喜久蔵（1989年）「天皇記事 中国のディレンマ」『諸君』21巻3号140頁。

8 中国側には羅平漢、田桓、劉天純、林代昭など、日本側には石川忠雄、国分良成、岡部達味、毛里和子、小島朋之、小島晋治、添谷芳秀、古川万太郎などの代表者が行った研究が数多くある。

でもない。中国の対外政策も同じである。従って、対外政策の重要な構成部分の一つの対日政策に内包される天皇イメージも中国の異なる段階の発展戦略と密接に関わっていたことを念頭に置かなければならない。

中国の対日政策における天皇の位置づけ、そしてその位置づけを基に発した天皇イメージについての歴史的な検討が必要であると考えるのはこの問題についての以上のような日中双方における研究の現状によるものである。

1.3 対象としての『人民日報』

前述したように、中国の対日政策における天皇の位置づけ、そしてその位置づけを基に発した天皇イメージを対象とした研究は極めて不十分であるため、本稿では、中国共産党中央委員会の機関紙として、政策決定中枢の直接の支配下にある『人民日報』における天皇記事を通して、中国共産党が発した天皇イメージを探ることによって、対日政策における天皇の位置づけを明らかにする。

『人民日報』は、一般大衆のみならず幹部クラスの人々に対しても、党指導部の思想、方針、政策を内外に伝え広めることを主旨とする、中国を代表するもっとも権威ある中国共産党中央委員会の機関紙である。そこに書かれた内容が、政策決定者の思考のパターンをかなり正確に代表していると考えられる。中国共産党の天皇イメージを分析の中心対象とする本稿は、『人民日報』のこのような性格に着目するものである。『人民日報』は、政策決定者の思考の変化を一定期間、一貫して観察する可能性を与えるからである。

『人民日報』の記事分析（主に、天皇記事の出現頻度、そして記事用語の語彙分析による統計分析）は、主観に左右されない、客観的データにもとづく判断が可能となるという積極的側面も存在する。この方法によれば天皇記事の出現頻度の変化や記事用語の語彙の変化を通して歴史の転換期を知ることができるだけでなく、これまであまり明確に意識していなかった問題の存在に気付くこともある⁹。

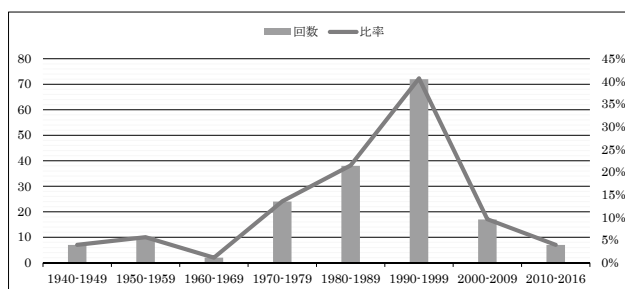
9 村田忠禧（2002）『『人民日報』元旦社説から見た中華人民共和国の歴史』『現代中国』76号

2. 『人民日報』における天皇記事の全体像

『人民日報』の天皇に関する見方を捉えるために、「天皇」「裕仁」「明仁」「日皇」という四つの言葉をキーワードにし、1946年から2016年までの『人民日報』の電子データベースで検出した結果、見出しに177件の天皇記事を確認することができた。

2.1 量的な変化

図1 『人民日報』における天皇記事の記事数（年代別）



年代別に整理した図1から、まず、各年代の記事数は変化が大きくて、バランスが取れていないことが分かった。次、変化の趨勢から言えば、60年代の谷間を境目に50年代と90年代をピークにした二つの山の存在が確認できる。最後に、各年代の記事数から言えば、60年代と90年代がそれぞれ最も少ない氷河期と最も多い激動期であることが分かる。

戦後中日両国、さらに世界のあり方を規定していた冷戦構造の推移が時代を切り開く大きな流れであることは言うまでもない。よって、中国の対日政策における天皇の位置づけ、そしてその位置づけを基に発した天皇イメージもこの流れに乗らなければならない。

上述した量的な変化は、中国共産党が天皇に対する関心度は時代とともに変化し、それぞれ50年代朝鮮戦争の勃発による冷戦体制の成立と60年代ベトナム戦争による冷戦の変容、さらに90年代ソ連の崩壊による冷戦の終焉と緊密に連携していることが考えられる。

2.2 質的な転換

60年代の変容期に、中ソ対立が起こり、両者の亀裂は年ごとに深まり、共産圏の団結を打砕いた。一方、西欧と日本は経済の高度成長を達成したことによって、アメリカの優位も低下した。

このような背景の下に、60年代の末から70年代の初めにかけて、中米和解に至る中国共産党の外交政策の転換が生じた。この転換の過程で、中国共産党の世界認識、外交政策に内包される対日政策も調整し、さらに、対日政策に内包された天皇イメージも転換を迎えなければならなかった。

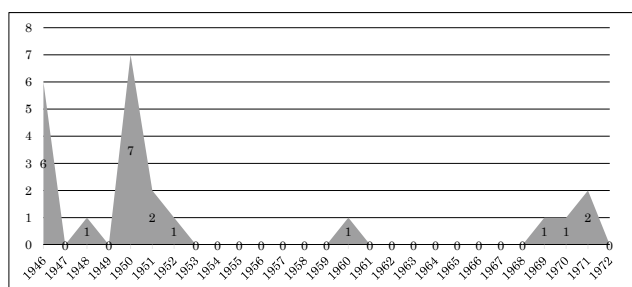
この転換の具体的な事例として、1972年前後の『人民日報』における天皇記事の内容の変化が挙げられる。72年を境目に、天皇記事の内容が大きく異なる。裕仁天皇を細菌戦犯として裁くべきと訴える50年代をピークにした40年代から1972年までの主旋律は批判・対立であり、それに対して、明仁天皇を国賓として訪中に招待する90年代をピークに1972年から今日までの主旋律は友好・協力へと変わった。

このような質的な転換は72年の中日国交正常化による敵対から友好へと変わった中日両国の関係に規定されたと考えられる。

今回は紙幅の関係から、中日国交正常化までの天皇記事に絞って、天皇イメージの変遷はどのように変化を成し遂げてきたかを明らかにする。

3. 国交正常化までの天皇記事の変容

図2 『人民日報』(1946-1972)における天皇記事の記事数(年度別)



批判・対抗を主旋律とした前期の天皇記事は1946年、1948年、1950-52年、1960年、そして1969-71年に現れたことが図2から分かる。

この五つの時期を日本の戦後史を照合すると、天皇記事のタイミングがはっきりわかることができる。一言でいえば、戦後日本にとって非常に重要な選択を迫られていた時に、『人民日報』の天皇記事が出てくるということである。その非常に重要な選択とは、1946年に天皇とマッカーサーとの会見、極東国際軍事裁判

審理開始、憲法議会ともいうべき第90回帝国議会、日本国憲法の公布；1948年に民主自由党の結成、極東国際軍事裁判の結審と宣告；1950-52年に講和論争、サンフランシスコ平和条約と日米安全保障条約の調印と批准・発効；1960年に安保闘争、新日米安全保障条約の調印と自然成立；1969-71年に佐藤栄作総理大臣とリチャード・M・ニクソン大統領との間の共同声明、日米安保条約の自動延長、沖縄返還協定の調印である。以上の五つの時期での出来事背景には一つ共通な力がある。それはアメリカである。戦後日本が米軍の占領下に置かれ、当時の日本政府は独立外交権を喪失しており、完全にアメリカを首とする西側陣営に従属していた。1952年になって、占領が終わったが、日米安全保障条約という名目で日本の対米従属関係が強く維持されている。このような状況に基づき、本章では、1952年を境目に、占領期と主権回復後と分けて、米中の対日政策の変化を念頭に置きながら、国交正常化までの天皇記事の推移を分析する。

3.1 占領期における天皇記事

戦後、中国においては、内戦の勃発により、国共両党が政権争いが展開されていた。1949年10月1日に中華人民共和国の建国を宣言した中国共産党にとっての至上命題は1949年を前後にそれぞれ政権奪取と政権維持であった。それが故に、新中国の成立1949年を境目に、占領前期（46年と48年）と占領後期（50年と51年と52年）の小区分を設けて、占領期の天皇記事を分析する。

3.1.1 占領前期の天皇記事

占領前期の天皇記事は、1946年に、天皇とマッカーサー元帥との会見、天皇が第90回帝国議会の開院式に勅語をしたこと、衆議院議会に初登壇した共産党の徳田球一書記長と政治局員野坂参三が衆議院議会での質疑、さらに東京裁判でソ連の検察官が天皇を戦犯として審判を受けるべきと主張したこと、1948年に、天皇に罪を責めることを要求し、民主自由党を譴責したことを報道した。

これらの天皇記事は、当時の日本での天皇制をめぐる一連の動きに注目し、天皇（天皇制）を批判したが、

「天皇打倒」という対決姿勢は取ってなかった。

このような姿勢が取られた理由は、まず、中国共産党にとって、国共内戦に対する積極的な調停から消極的な静観へとアメリカの政策転換による国際情勢ははっきりなっていなかったことが挙げられる。また、戦後アメリカの占領下に置かれていた日本においては、占領を円滑に遂行するため、昭和天皇の権威が利用され、天皇制の存続がはかられた。実は、中国共産党もアメリカと同じように、天皇の持っている宗教的な影響力を重視し、敵国である日本が戦後も天皇を戴いた政府との共存を構想していた¹⁰。このような構想は野坂参三をはじめとする日本共産党が掲げる占領軍下の平和革命論と一致している。「非軍事化・民主化」が主眼である初期の対日占領政策によって、コミンテルンの兄弟党である日本共産党が合法的政党として日本の政治舞台に登場するようになった。当時、政権に近づいていく中の中国共産党にとって、国際共産主義運動と統一戦線を背景に、日本の再建をリードしようとする日本共産党への声援として、上述した姿勢を取ったのではなかろうか。

しかし、東西両陣営の対立激化にともない、とりわけ1948年、中国における共産党勢力の盛り返しと朝鮮の南北分裂は、アメリカの対日占領政策の見直しを迫るものであった。

それは、中国にかかわって、日本をアジアの拠点にする必要となったのである。そこで日本を初期の対日占領政策によって弱体化、民主化するのではなく、アメリカの従属的同盟国として復活・強化させる政策への転換が開始されることになった。

その後、日本を拠点とするアメリカの反共姿勢が徐々に明らかになる中で、中国共産党も、日本からの脅威が再び現実化すると見なした。

3.1.2 占領後期の天皇記事

占領後期の天皇記事は、1950年に、昭和天皇を裕仁と呼び捨てにしていたにも限らず、さらに「細菌戦犯」や「殺人犯」や「日本の侵略者」と呼び、アメリカに庇い続けられている戦犯裕仁を迅速に審判すべき

だという中国各地の人々からの主張を報道した。また、1951年に、元日本将校は日本が米国の軍事要求に反対すべきだと天皇に対する上書の行動、及び京都大学の学生が天皇の車を包囲、単独講和と日米安保と再軍備に反対する公開質問書を天皇に提出した行動を記事にした。1952年に、天皇は莫大な資産を持っていること、及び各有力財閥と密接に関わっていることを理由に、彼が大地主・大資本家であると報道した。

まず、1950年の天皇記事について説明する。朝鮮戦争勃発直前の1949年、ソ連は極東において対米の妥協から攻勢に転じた¹¹。東京裁判の対抗措置として12月にハバロフスク市で「細菌戦用兵器の準備及び使用」の件で元関東軍731細菌戦部隊12人に対する起訴と裁判を行った。裁判で昭和天皇の責任が明らかになったため、ソ連は、のちに1950年2月1日にアメリカ側に公式に天皇の訴追を要求した。しかし、これに対して、アメリカは直ぐ、拒否の声明を発表した。ソ連がアメリカの拒否声明後も国際世論を自分に有利に運ぶため、国際特別軍事法廷を設立しようと提案する口上書を中華人民共和国政府に送った。

当時の中華人民共和国は建国間もなく、台湾の国民党政権がアメリカの支援を受けて「大陸反攻」をうかがうという情勢下でソ連との提携を強め、1949年12月、毛沢東がモスクワを訪問してスターリンと会談した。翌1950年2月、日本を仮想敵国とした軍事同盟を結ぶために、中ソ友好同盟相互援助条約が締結された。この条約の下で「向ソ一辺倒」の外交姿勢を選んだ中国は1950年6月に勃発した朝鮮戦争に参戦し、中米両軍が真っ向から対決するようになった。それ以来の米中関係が敵対へと大きく転換させ、アジアの国際関係も根本的な変更がなされた。

徹底的な天皇批判を行った1950年の天皇記事は天皇を利用し、日本をアジアにおける反共の砦をさせようとするアメリカに対する批判が本音である。さらに、冷戦の勃発の下で、中国は新政権を維持するため、ソ連の対米攻勢という冷戦の大局に従って、中日間の対決姿勢を示すによって、ソ連から安全保障を求めるこ

10 寺出道雄・徐一睿（2011）『毛沢東の野坂参三宛て書簡』『三田学会雑誌104(2)』178（330）頁。

11 スターリンの指示で、極東国際軍事裁判の参与検察官会議でソ連が天皇訴追を提起しなかった。栗屋憲太郎・NHK取材班（1994）『東京裁判への道』NHK出版 144-162頁。

とが真意だといえよう。

次に、天皇に対する上書、及び公開質問書の提出を内容にした1951年の天皇記事は裕仁天皇を日本の政治的意思決定における重要なアクターと見なし、上書と公開質問書を無視したことを通して、彼が単独講和と日米安保を支持するイメージも強調しようとしていた。彼の関与の下に、講和問題で示す日米両政府の連携に強化された日本の反共軍事同盟体制-日米安保（特に、再軍備と海外派遣）について警戒心と反対姿勢を伝えようとした。なお、大地主・大資本家を兼備する天皇を土地改革¹²・三反五反運動¹³対象としてイメージを描かれた1952年の天皇記事¹⁴は、今まで戦犯を審判する枠を超え、階級闘争のレベルまで引き上げ、徹底的な敵視をアピールした。

このような天皇批判がエスカレートされた背景は、朝鮮戦争の真っ只中に、米国の主導で日本側による戦後中日対立関係の基本構造¹⁵が形成されたことがある。中国は、このような戦後中日対立関係が、日本の政治的意思決定における重要なアクターである天皇の関与の下に、日本政府が主権回復を条件に、アメリカとのやり取りの結果¹⁶だと見なしたから、徹底的な天皇批判を行った。

3.2 主権回復後の天皇記事

主権回復後の天皇記事は、1960年の一件を除けば、1953年から1968年までの16年間に全く掲載されていなかった。それに対して、記事が出現したのはただ1960年、69年、70年、71年の4年、全てわずかに5件にと

どまっている。このような極めてアンバランスが生じているため、ここで主権回復後を真空期と出現期と分けて、天皇記事を分析する。

3.2.1 天皇記事の真空期

1953年スターリンの死から1970年代初めまでの中国外交は対外協調から闘争対立へと路線が変わった。対米ソの政策においては、「向ソ一辺倒」の反米親ソから「二つの拳で打つ」の反米反ソへと転換があった。

対日認識に関しては、1952年の対日平和条約の発効および日華条約調印に関して、周恩来は中国が日本と台湾の国民党政府をアメリカ反動派が飼育した二匹の「走狗」と見なしたことを表明した。この声明¹⁷では、中国が「走狗」の主人であるアメリカが日本を極東軍事戦略の砦としてアジア侵略政策の道具として、日本の軍国主義の復活を放任し、対中敵視政策を行わせたと表明した。つまり、中国の安全保障に対する最も現実的な脅威を持っているのがアメリカであり、日米の連動がない限り、日本だけが中国の安全保障に対する軍事上での現実的な脅威を持っていないという認識があったことも考えられる。

このような外交政策の転換及び対日認識の下で、対日政策においては、まず、日本との関係を正常化をさせたいと表明した1954年の「対日関係に関する中ソ共同声明」と1956年の日ソ国交回復の影響を受け、中国政府は貿易拡大の呼び掛けを代表する対日の「平和攻勢¹⁸」を展開した。これに応じて、日本側は「政経分離」路線で民間交流の拡大を認めた。しかし、1958年の長崎国旗事件をきっかけに、すべての貿易契約が破棄された。中国政府はあらためて「政経不可分」を強調し、文化・スポーツ交流も停止された。これによって今まで模索した「政経分離」路線の事実上の破綻を意味したのである。

中ソ関係は早くも1958年の台湾海峡危機前後の時期に、一方では中ソ間の深刻な利害対立としての中国の核保有をめぐる軍事防衛抗争を通じ、他方では、中国内部の人民公社、大躍進政策をめぐって、深刻な決裂

12 1952年に完了した中国本土における土地改革の手段は立ち上がった貧農たちが地主・富農を自らの手で打倒（しばしば処刑）し、彼らの土地・資産を分配することである。この手段による土地改革は農村と農民の支持を背景に都市と権力を奪取した中国革命の過程で大きな役割を果たした。『日本大百科』

13 1952年夏ごろに終了した三反五反運動はブルジョア階級のプロレタリア階級に対する攻撃を排除し、人民政府と人民大衆の連係を深め、仕事の作風を改め、資本主義商工業の社会主義改造に有利な条件を作りだし、人民民主独裁と国営経済の指導的地位を強化するうえで重要な役割を果たした。『世界大百科事典』

14 1952年7月19日『人民日報』に掲載された「裕仁は大地主でもあり、あの大資本家でもある」という記事は、時期的には主権回復後に属するが、内容は占領後期の延長線上にあるため、占領後期の記事だと区分する。

15 1951年9月に、日米間で締結された日米軍事同盟を規定する「日米安全保障条約」と単独講和を内容とする「サンフランシスコ講和条約」と、1952年4月に、日本が台湾の蒋介石政権との間で調印された「日華平和条約」という三つの条約が戦後中日対立関係の基本構造を形成した。

16 1952年5月5日「対日平和条約発効および日華平和条約調印に関する周恩来外交部長の声明」『人民日報』1952年5月7日

17 1952年5月5日「対日平和条約発効および日華平和条約調印に関する周恩来外交部長の声明」

18 石井修（1986）「米国にとっての日本問題-1954年夏」『アメリカ研究』20号 170頁。

をみていたことが明らかになった。さらに、1960年7月にソ連が対中援助協定を突然破棄した。同時に派遣していた1390名のソ連人技術指導者全員を一斉に引き上げた。そのため、当時着工中であった257の経済プロジェクトはすべて停止の憂き目に遭った。

この局面を開くため、8月、周恩来首相が「対日貿易三原則」を提示し、事実上の政経分離のもとでの中日関係が再開することになった。

60年代後半のベトナム戦争の激化によって、中国の外交政策が「二つの拳で打つ」の反米反ソへと変わった。これをより強力に実施するため、日本との関係改善が重点とされていた。中日貿易は1965年に、中ソ貿易を上回り、1966年から中国の対外貿易の第一位を占めるまでになった。このような局面は1980年代中後期までずっと続いていた¹⁹。

このように、反米外交を堅持してきた中国にとって、親ソから反ソへと外交政策の変容の中における日本が次第に影響のある役割になってきた。これは、1960年の一件を除けば、1953年から1968年までの16年間に天皇記事が全く掲載されていなかった最大要因だといえよう。

また、日本では、万世一系の天皇から象徴天皇へ、戦前から戦後へと天皇像は著しく変化し、皇室と国民の距離は甚だしく変容した。代表的なのは1959年皇太子（明仁天皇の皇太子時代）成婚に際しては、初めて民間出身の女性を皇太子妃に迎え、その妃の名前にちなんで「ミッチーブーム」と称される皇室人気、国民の間に広く浸透した。これ以後、これまでその生活が庶民の前には明らかにされなかった天皇家・皇太子家等の様子がテレビや女性週刊誌に頻繁に登場するようにもなった。政治学者の松下圭一は、これら一連の「ミッチー・ブーム」社会現象を切り口にして天皇制を分析し、1959年の著作『大衆天皇制論』で、「皇太子の家庭は『恋愛』によって成立した『平民』の家庭というイメージがそこにつくられた。こうして皇室は、新憲法下の大衆社会状況に適合させられていく。……天皇は、政治的・軍事的性格を喪失して、文化的かつ家庭的性格を持つようになる。科学者家庭の団らんが皇

室のイメージとなる²⁰」と分析した。このような日本における天皇制の変化も中国共産党の天皇認識に影響を与え、天皇記事が全く掲載されていなかった要因の一つだといえよう。

このように、中国は、戦後日本における天皇制の変化を視野に入れながら、日本が中国の安全保障に対する軍事上での現実的な脅威を持っていないという認識の下で、中国の外交政策の転換の展開プロセスにおいて、中日関係の改善が極めて重視されたことによって、天皇記事の真空期があったわけである。しかし、日米安全保障条約の改定に当たり、中国は再び日本が安全保障に対する軍事上での現実的な脅威を感じるようになった。それと同時に、天皇記事も再び登場するようになった。しかし、批判の対象は天皇本人から天皇を利用しようとする日米反動派へと変わった。詳しくは次節で論じよう。

3.2.2 天皇記事の出現期

主権回復後の天皇記事は、1960年に、天皇が自衛隊幹部に戦後初めての会談について、米日反動派が軍隊に軍国主義思想を強化しようと主張した。1969年に、『新指導要領』の改正で示された教育政策の変動に着目し、教科書問題の提起を通して、日本のファッショが軍国主義招魂のため、天皇を美化、歴史を歪曲、天皇に関係する捏造された神話を青少年に植え付けると報道した。1970年に、戦前の天皇と軍国主義との関係を明らかにした上で、戦後日本軍国主義の失敗とともに、天皇の地位が弱まったことを認めた。しかし、現在日本軍国主義の復活につれ、日本の反動派は改めて天皇を持ち上げ、日本軍国主義の所謂「精神の支柱」を確立しようとすることによって、国内で日本国民を残酷に鎮圧し、海外に侵略拡張を行い、新たな戦争冒険を準備していると強調した。1971年に、三島由紀夫の自殺から日本社会に天皇制復帰の騒動的な雰囲気があることを背景に、神道の復帰、皇室を中心にした神話が載られた日本史教科書、明治天皇の誕生日と新年及び旧紀元節の際に明治神宮などの神宮で盛大なお祭り、自民党が「靖国神社法案」を国会に提出したなど

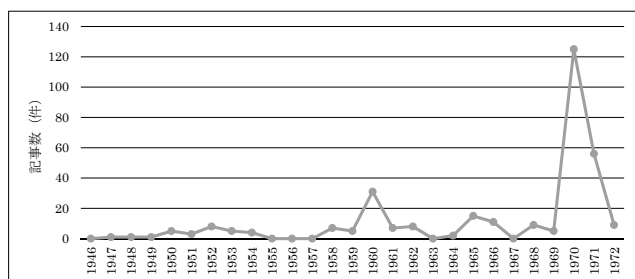
19 陳樹濱&王長民（1997）「中日貿易回顧与展望」『対外経貿』（5）20頁。

20 松下圭一（1994）『戦後政治の歴史と思想』筑摩書房 89-90頁。

様々な行動はすべて天皇を「神聖にして侵すべからず」絶対的な権威を持たせようとする企みであり、日本国民に天皇を盲目的に崇拜させ、天皇のために無理やり命がけで働かせるためであると主張した。また、日本の反動派はマスコミを始動させ、天皇の裕仁の「徳政」をおだて上げ、彼の戦犯イメージを取り除き、極力に裕仁を「平和主義者」、「人民を大切にする英明な天子」と扮装し、特に天皇夫妻をヨーロッパを訪問させ、その社会的地位をつり上げようとしていると主張した。最後に、これらの行動は日本の軍国主義分子が天皇と軍隊が一体化した戦前の反動的な封建の軍事ファッショの体制を極力に再建していることを表明すると強調した。

以上の記事には、「軍国主義」という共通な言葉が存在している。図3からこの時期の天皇記事は濃厚な軍国主義批判ムードに覆われていることが分かる。岡部達味²¹は、中国が日本軍国主義批判を行う理由について、「かつて日本の軍事侵略の対象となった国として、中国が日本の軍事侵略再現に対する危惧と警戒の念を持っていることと、時の日本政府の諸政策、特に対中国政策が、中国にとってきわめて望ましからざる性格のものである時に、そのような中国側の意思を表明する手段として、また日本政府のそのような政策に対する『日本人民』の強い反対闘争をよびかけるための手段としての側面を濃厚にもっていたこと」と二つの要因で説明した。

図3 『人民日報』(1946-1972)における日本軍国主義批判の記事数²² (年度別)



主権回復後の天皇記事の背後にも、以上のような二

つの要因が存在していることは明らかであるように思われる。

なお、軍国主義批判と天皇と結び付いたこの時期の天皇記事の出現時点が日米安保条約の改定の時点とほぼ重なり合っていることから言えば、これらの記事は普段の軍国主義批判を超えて、アメリカのアジア軍事戦略に呼応する、という純粋的な二国間の防衛関係を超える日米同盟の性格を断固として反対する同時に、日本の軍事力の拡大と軍事大国化への復活による現実的な軍事的な脅威に対する警戒感を強く打ち出した軍国主義批判の最高峰であることが過言ではない。

1960年の新安保条約が締結される前に、中国外交部は、これは「日本の反動派とアメリカ帝国主義とが結託し、新しい侵略と戦争を準備し、アジアと世界の平和を脅かす極めて重大な段取りである」と評し、「日米軍事同盟条約の調印は、日本軍国主義がすでに復活したことのしるしであり、日本がすでにアメリカの侵略的な軍事ブロックに公然と参加したことのしるしでもある²³」と非難した。翌日の『人民日報』は、社説で、「過去、日本が米国が画策した極東での侵略戦争におけるただ供給基地の役割を果たしたと言うのならば、今度、新たに調印される日米軍事同盟条約に従えば、日本は米国侵略軍事グループの正式の一員になり、完全に米国の原子戦略システムに組み入れられて、直接にアメリカの極東における侵略と拡張の共犯者を務めることになる」と主張し、さらに、「日本の軍国主義勢力が、再びアジア各国人民の現実的な脅しになり、これに対して、アジアと世界各国人民の強い警戒心を引き起こさないわけにはいかない²⁴」と強調した。

1970年安保条約の改定を控えて、1969年の佐藤・ニクソン共同声明に、台湾と日米安保条約の項目が盛り込まれたこと²⁵に対して、『人民日報』は、今回の日米首脳会談が「日米反動派の軍事的結託を新しい段階に至らせた。即ち、米帝国主義の反革命的世界戦略の中で、日本はアジアの憲兵として起用され、中国人民、朝鮮人民、ベトナム人民をはじめ、アジア各国人民を

21 岡部達味 (1971)『現代中国の対外政策』東京大学出版会 13-14頁。

22 「日本軍国主義」という言葉をキーワードにし、1946年から1972年までの『人民日報』の電子データベースで検出した結果によって、筆者が制図。

23 「中華人民共和国外交部が声明を発表 我が国が日米軍事同盟条約を断固として反対」『人民日報』1960年1月15日。

24 「日米軍事同盟を断固として反対」『人民日報』1960年1月15日。

25 詳しくは「佐藤栄作総理大臣とリチャード・M・ニクソン大統領との間の共同声明」の第4と5条に参考。

26 「日米反動派の罪惡的陰謀」『人民日報』1969年11月28日。

反対する急先鋒になる」と訴え、「米帝国主義と日本の反動派は、かれらの軍事同盟を更に強化させ、新しい侵略戦争を画策・準備するのを急いでいる。この動向にアジア人民が嚴重な注意を払うべきである²⁶」と呼びかけた。

このように、中国は、安全保障の視点から、「走狗」であった日本がアメリカに従属だけではなく、より積極的にアジアの安全に関与した姿勢によって、アジアの地域安全（自国、特に台湾）に現実な脅威をもたらしたと考えた。特に、経済が次第に強大になり、軍事的な負担も増やすべきであるという日本の軍事力増強を希望するアメリカの方針の下で、日米安保改定による「走狗」の身分と分かれを告げ、平等ではないが、徐々にパートナーにもなりつつあることを危惧した。このような懸念を強く抱いていた中国は、日本が中国の安全保障に対する軍事上での現実的な脅威が次第に増していると感じ、日米安保改定にあたり、その都度、軍国主義復活の道具として、天皇を利用しようとする米日反動派に対する批判も高まってきた。

終わりに

大国主導による勢力圏確定の発想が色濃く存在したヤルタ体制ともいわれる戦後体制から始まる米ソを軸とした東西冷戦構造の本格化により、中日両国が自国の安全保障のため、それぞれ相互対抗の陣営に身を投げざるをえなかった。脅威から身を守るという一番分かりやすい理由で、各自に政策や路線を取っただけで、天皇も中国共産党もさらに、中国も日本も冷戦構造の形成・勃発・終焉という世界規模の力の変動によって左右された。

戦後日本の対米従属構造の下に天皇の権威があり、さらにその下で営まれるものとして戦後民主主義は規定されていた。してみれば、象徴天皇制とは、大枠としての対米従属構造の一部を成すものである²⁷ことが考えられる。

戦後から1971年中米接近までの中国共産党にとって

一番現実的な外部脅威は反共姿勢を堅持していたアメリカである。対米従属構造の一部である象徴天皇制も対立し続けた米中関係に規定され、中国の批判対象としての役割を演じ続けた。

しかし、普通の批判対象と異なり、敗戦によって、天皇は神性が確かに喪失したが、日本の象徴として生き延び、大きな影響力を持っている。それを無視できるものではないから、中国も慎重な天皇批判を行わなければならない。

その批判の特徴は天皇を政治における権威と権力を兼備する重要なアクターから権威と権力を分離した「国および国民統合の象徴」への認識の転換²⁸をバックに、自身への脅威の現実性と危険度に合わせ、対象が天皇本人から天皇を利用しようとする日米反動派へと、内容が「戦争責任者⇒細菌戦犯⇒大地主・大資本家⇒軍国主義者」と異なってくるのである。

72年の中美接近と中日国交正常化によって、東アジア冷戦の力構造が大きく変化させ、再編された。その後、天皇を中日首脳外交における要人として扱われた積極的な記事が天皇記事の主流となったが、歴史認識や戦争責任などのネガティブな記事も散見できる。

国交正常化以降の天皇記事の推移とその特徴の分析を次回別稿で論じたい。

参考文献：

- 羅平漢（2000）『中国対日政策与中日邦交正常化：1949-1972年中国対日政策研究』時事出版社
- 田桓（2002）『戦後中日関係史（1945-1995）』中国社会科学出版社
- 劉天純等（2004）『日本対華政策及中日関係』人民出版社
- 林代昭（1992）『戦後中日関係史』北京大学出版社
- 史桂芳（2014）『中国の対日戦略与中日関係の研究：（1949-）』中国社会科学出版社
- 岡部達味（1976）『中国の対日政策』東京大学出版会

27 白井聡「岐路に立つ象徴天皇制」『週刊新潮』2016年8月25日129頁

28 「日本の軍国主義は第2次大戦で敗北に終わり、天皇の地位も弱まった」から、中国共産党の戦後天皇制に関する認識の変化が読み取れる。「戦前日本の天皇制」『人民日報』1960年1月15日。

国分良成（2017）『中国政治からみた日中関係』岩波書店
毛里和子（2006）『日中関係：戦後から新時代へ』岩波書店
小島朋之（1995）『アジア時代の日中関係：過去と未来』サイマル出版会
小島晋治（2008）『近代日中関係史断章』岩波書店
添谷芳秀（1995）『日本外交と中国』慶応通信
石川忠雄（1973）『日中問題私見』酒井書店
石川忠雄、中嶋嶺雄、池井優編（1970）『戦後資料日中関係』日本評論社
外務省アジア局中国課監修（1970）『日中関係基本資料集』霞山会
古川万太郎（1981）『日中戦後関係史』原書房

鹿児島市の空襲記録に関する一考察

—文献記録を中心に

人文社会科学研究所 地域政策科学専攻 地域政策コース 1 年
江 山

はじめに

第二次世界大戦で、日本本土の各地は米軍による爆撃を受けた。その中で、鹿児島県も本土最南端に位置しているうえ、特攻基地が数多く存在しているため、激しい爆撃された。70年代の空襲体験者の高齢化をきっかけにして、空襲の記録活動は「転換期」を迎える。転換期によって、記録の手法や内容は異なると予測される。今日まで、鹿児島空襲に関する研究が少なく、小栗実や柳原敏昭の「米軍資料にみる6・17鹿児島空襲—米軍第21爆撃機集団『作戦任務報告書』(試訳)」¹が挙げられる。この論文は米軍「作戦任務報告書」を訳したものであった。鹿児島空襲の全体像や空襲記録は明らかになっていないと言えよう。戦争が終わって73年後の現在、戦争体験者の高齢化が進む中、戦争記憶の継承は大事な課題になった。戦争経験のない世代に戦争のことを理解してもらうために、そして戦争記憶の継承という意味で、後世に伝えなければならない。

本稿は第二次世界大戦末期、アメリカ軍による鹿児島市で行われた空襲の文献記録を研究素材とし、主に出版された文献資料を研究する「第一次転換期」を意識しながら、1945年から90年代末期まで、鹿児島市の空襲はどのように記録されているのか、そして記録する特徴を明らかにすることを課題とする。

1. 鹿児島市の空襲に関する文献記

本稿についてのいくつかの概念を説明する。まず、鹿児島県全体は爆撃をうけ、ここでは鹿児島県の一部としての鹿児島市だけを研究対象とする。そして、文献資料とは出版された鹿児島市の空襲記録に関する文献をさす。記録の内容として、空襲の概要と空襲体験に分けられることができる。

1945年の鹿児島市の空襲の概要を簡単に紹介する。第二次世界大戦末期にアメリカ軍によって鹿児島県鹿児島市と周辺に対して都市無差別爆撃が行われた。鹿児島市に対する空襲は1945年の3月から8月にかけて8回行われており、合計で死者3,329人、負傷者4,633人の被害を出した。鹿児島市に対する空襲の中では同年6月17日に行われた空襲は鹿児島市内一円に対して行われ死者2,316人、負傷者3,500人となり、最大の被害を与えた²。

図 1

公的記録

1967年 『鹿児島県史 第五巻』

1970年 『鹿児島市史』

1982年 『鹿児島市戦災復興誌』

民間記録

1955年 『鹿児島市戦災録 あれから十年』

1958年 『鹿児島駅被爆の日』

1963年 『鹿児島市秘話 勝目清回顧録』

1 小栗実 柳原敏昭「米軍資料にみる6・17鹿児島空襲—米軍第21爆撃機集団『作戦任務報告書』(試訳)」鹿児島大学社会科学雑誌(19)、1996年9月。

2 鹿児島市史編さん委員会『鹿児島市史Ⅱ』文進社印刷株式会社、1970年、778—779頁。

1965年	『激動二十年—鹿児島県の戦後史』
1968年	『鹿児島百年（下）大正・昭和編』
	70年代以降
1975年	『鹿児島駅被爆の日』再版
1984年	『鹿児島県の空襲・戦災の体験記録集』 をつくろう
1985年	『「鹿児島県の空襲戦災の記録」第一集（鹿児島市の部）』
1989年	『語りつぎたい 戦争と空襲の体験』
1996年	『忘れない あれから50年』

（筆者作成）

筆者は鹿児島県立図書館や鹿児島大学附属図書館を利用し、文献資料を集めた。次に、1945年から90年代までの鹿児島市の空襲記録に関する記録をまとめてみる。1955年に当時鹿児島市防空課長の本田斉が書いた『鹿児島市戦災録 あれから十年』³出版された。この本は最初の鹿児島空襲を記録した本であって、内容は防空課長としての所見がメインだった。本田斉によると、「元より多くの市民に依って後世に語り伝えられる事であろうが、当時私は戦争に関係の深い仕事に当たっていたので記憶を辿って記録することにした」⁴と述べていた。そして、この本は初の「鹿児島空襲」、「四月八日の大空襲」、「時限爆弾投下」など、空襲の概要を記録すると同時に、「家庭防空」、「建物疎開」、「竹槍訓練」、「国民義勇隊の結成」など当時の防空政策を記録した。この本は最初の鹿児島空襲に関する単行本として、その後出版された様々な鹿児島空襲に関する本に引用された。

1958年に白石信虎の『鹿児島駅被爆の日』⁵が出版された。この本は戦時中鹿児島駅指導助役として勤務した白石信虎の個人体験であった。当時空襲の様子について、この本の一部を紹介する。「爆音と爆弾の落ちる二重の轟音が、天をくつがえすような大音となつてうなる。敵機は今度も相当数の爆弾を落して、桜島の上空へ消えていった」⁶。そして、この本は1975年に

再版発行され、何故かといえば、著者はこう述べている。「しかしこうした日本の平和にはかかわりもなく、近年に至って東南にはベトナム戦争があり、続いて中東にも戦火がおきって、それはいまだに消えようとはしない。私は幾度かこれらの戦争の実況を、テレビの海外ニュースなどで見ながら、心に限りない悲しみを覚えた。……この平和な日本にも、また再び戦争が起ったとしたらどうであろう！……戦争を知らない人に、そして戦争を体験していない人々に、どうしても戦争の悲劇というものを知っていただきたい」⁷。ベトナム戦争の見て、著者は当時自分が体験した空襲のことを思い浮かび、平和への想いがあった。

1963年に、『鹿児島市秘話 勝目清回顧録』⁸が出版された。著者は1946年から1959まで鹿児島市長を務める勝目清であった。勝目清回顧録は、1959年10月1日から、1961年3月31日まで、南日本新聞に連載された。1963に本として出版され、この本は勝目清の個人の回想録となり、内容的には主に空襲の概要を記録したものである。空襲被害について、『鹿児島市秘話 勝目清回顧録』によると、「この空襲で市内の大半は焼失したばかりでばく、死者二千三百余、負傷者三千五百余、災害を受けた市民約九万人、死者のお世話もじゅうぶんの準備がなかったので、なかなか苦労された。……鹿児島市は市街地九割三四分を焼失した」⁹。

1965年に、柳本見一の『激動二十年—鹿児島市の戦後史』¹⁰が出版され、この本は毎日新聞の特別企画のニュース読物「激動二十年」を各県毎にとりまとめたもので、「鹿児島の初空襲」「最大の空襲」などの内容があった。主に空襲の概要を記録した。

1967年に、初の公的記録としての『鹿児島県史 第五巻』¹¹が出版された。この本は鹿児島県全体の空襲を記録した文献資料になる。この本は初めて空襲被害の具体的な数字を出した。

1968年に出版された『鹿児島百年（下）大正・昭和編』¹²があった。この本は明治維新を記念するため、

3 本田斉『鹿児島市戦災録 あれから十年』鹿児島県立図書館所蔵、1955年。

4 本田斉『鹿児島市戦災録 あれから十年』鹿児島県立図書館所蔵、1955年、「はじがき」。

5 白石信虎『鹿児島駅被爆の日』三州写真製版社、1975年。

6 同上、56頁。

7 同上。

8 勝目清『鹿児島市秘話 勝目清回顧録』南日本新聞社、1963年。

9 同上、160頁。

10 柳本見一『激動二十年—鹿児島市の戦後史』毎日新聞西部本社、1965年。

11 鹿児島県編『鹿児島県史 第五巻』淵上印刷株式会社、1967年。

12 南日本新聞社編『鹿児島百年（下）大正・昭和編』春苑堂書店、1968年。

主に当時の新聞記事を利用して作成したもので、大正政変から終戦までの鹿児島県の出来事を記録した。内容的に、「元日の朝のB29」、「吹き飛んだ肉体」があり、主に個人の空襲体験であった。その中の一人の体験として、「作業服を着た六十歳ぐらいの老人があお向けに倒れ、しかもその胴体が真っ二つに切られている。さらにその先の方にも、幾人かの人影が次々と倒れていた」¹³と記録されていた。この本は初めて個人の空襲体験集といえる。

1970年に鹿児島市史編さん委員会が編集した『鹿児島市史Ⅱ』¹⁴（以下は市史と呼ぶ）は出版された。『鹿児島市史Ⅱ』は鹿児島市誕生以来、政治、経済、社会、教育、文化の各分野について、あらゆる資料を収集し、記録したものである。鹿児島市の八回の空襲を毎回どのように行われたかを記録し、被害の数字に関しては『鹿児島県史 第五巻』より具体的であった。市史によると、鹿児島市の被害は「これら前後八回にわたる空襲によって、鹿児島市が受けた被害は、実に死者三三二九名・負傷者四六三三名・行方不明三五名・その他一〇万七三三八八名・合計一万三三八五名に達した。……建物の罹災戸数、全焼二万〇四九七戸・半焼一六九戸・全壊六五五戸・半壊六四〇戸・合計二万一九六一戸で、全戸数三万八七六〇戸に対して五七%であった」¹⁵となっている。

1982年に、『鹿児島市戦災復興誌』¹⁶が出版された。この本は1978年11月鹿児島戦災復興誌編集委員会設置準備会が開かれ、1979年8月に戦災復興30年誌編纂担当参事が置かれて作業に入り、同年10月に戦災復興誌編集委員会設置要綱を定めた。1979年11月に、第1回編集委員会が開催され、編集方針やスケジュールが決定された。その後二年かけて編集作業が続き、1982年3月に出版された。本の内容に関しては、空襲の被災記録や復興事業が重心になり、「昭和20年の8回にわたる大空襲の被災記録、そして焦土のなかから奇跡的な復興をなしとげた戦災復興事業の全容が重心になっており、とくに戦災記録には、戦争を知らない世代へ

向け、体験者の生々しい声をあわせて集録しました」¹⁷と述べている。そしてこの本は空襲当時の市街地や市民生活の写真をたくさん載せていた。

1984年に、市民団体の鹿児島の空襲を記録する会編の『「鹿児島の空襲・戦災の体験記録集」をつくろう』¹⁸が出版された。この時期はすでに全国各地で「空襲・戦災の体験記録集」が出版され、被害の大きい鹿児島はまだ体験記録集がなかった。鹿児島の空襲体験記録集を作るという目的で、鹿児島の空襲を記録する会が空襲・戦災に関する体験記、戦時中の生活に関する文章や記録、資金などを集めるために、この本を出版した。この本は主に、鹿児島県史、鹿児島市史、鹿児島戦災復興誌や地域の郷土史・誌を参考にして作成したもので、空襲の概要である。

一年後の1985年に、鹿児島の空襲を記録する会編の『「鹿児島の空襲戦災の記録」第一集（鹿児島市の部）』¹⁹が出版された。この本は、空襲概要の部分は『鹿児島市戦災復興誌』や『鹿児島市戦災録 あれから十年』の内容を引用し、主に個人の空襲体験である。本の中に、次のような記録があった。「何時頃だったでしょうか耳を貫くようなキーンという金属音がしたかと思うと次の瞬間ぐらぐらと玄関の方から傾いてきました。直撃ではないのですが近くに爆弾が落ちたのです。爆弾は城山ぎわたに沿って何発も落ちたようです。庭で遊んでいた長男は幼いながらも弟を背負いはだしのまま夢中で外に逃げました」²⁰。生々しい記録であった。

1989年にかごしま県民生活協同組合編の『語りつぎたい 戦争と空襲の体験』²¹が出版された。この文集は1988年の六・一七鹿児島の戦争と空襲を考える集いで発行した文章と県内の戦争の記録や、戦前戦後の年表を収録した。発行の目的について、冒頭にこう述べている。「熱い夏が来て、しみじみと平和をかみしめる戦争体験世代は、五十の坂を超えています。この静

13 同上、521頁。

14 鹿児島市史編さん委員会『鹿児島市史Ⅱ』文進社印刷株式会社、1970年。

15 同上、779頁。

16 鹿児島市戦災復興誌編集委員会『鹿児島市戦災復興誌』南日本新聞開発センター、1982年。

17 同上、「あとがき」。

18 鹿児島の空襲を記録する会編『「鹿児島の空襲・戦災の体験記録集」をつくろう』朝日印刷、1984年。

19 鹿児島の空襲を記録する会編『「鹿児島の空襲戦災の記録」第一集（鹿児島市の部）』朝日印刷、1985年。

20 同上、240—241頁。

21 かごしま県民生活協同組合編『語りつぎたい 戦争と空襲の体験』、1989年。

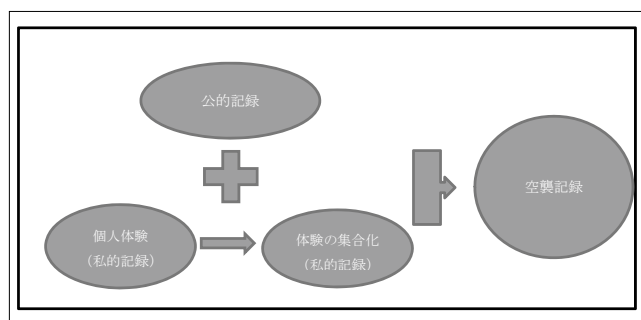
かな時に今一度戦争とはを問直し、平和の意味を探る時ではないかと思います」²²。戦争と空襲体験を通して、もう一度戦争と平和の意味を考えるのは目的である。

最後に、1996年に生活協同組合コープかごしま編の『忘れない あれから五〇年』²³が出版された。この本は鹿児島県民の空襲や戦争体験集であって、特攻、空襲、兵隊生活などの内容を

収録している。そして、1995年に第二次世界大戦終戦50年を迎え、核兵器と戦争のない世界の実現という気持ちを込めてコープかごしまはこの記録集を企画した。

2. 空襲記録の歴史

図2 空襲記録の構成



(筆者作成)

鹿児島市の空襲はいかに記録されているのかといえ、以上の文献をまとめると、70年代まで空襲を記録した民間の出版物がすこし出たが、個人の空襲体験は主流であった。1967年や1970年に出版された『鹿児島県史』や『鹿児島市史』は最初の公的記録として、信頼性が高く、県と市の調査によって、空襲に関する被害の規模や具体的な数字は定着した。その後、70年代以降、日本は空襲体験者の高齢化や反戦運動の影響により、個人の空襲体験を記録する運動が盛んになった。空襲体験記録のほとんどない状態から、記録するようになったのはこの70年代であるため、70年代を転換期と捉えることができる。鹿児島では、初めて動き

出したのは南日本新聞であった。1972年1月14日の南日本新聞では、空襲体験募集と戦争体験者三人による座談会の記事が掲載されている。空襲体験を募集する意味について次のように記しています。「本社はいま鹿児島県内の空襲体験記を、県民諸者の方から募っています。いまになって被災記録をまとめようとするのは、鹿児島県内は全国でも有数の被爆地でありましたが、全権的な記録はまだ整備されていないからです」²⁴。鹿児島も空襲体験が健全に記録されていないことが分かる。そしてその時期、鹿児島も全国的な空襲記録しようという影響を受けたといえる。

1984年の時点で、日本各地ですでに「記録する会」は数多くの記録集を出版したが、鹿児島県がすこし遅れており、鹿児島県の空襲を記録する会が出版した初めての出版物は1984年の『「鹿児島県の空襲・戦災の体験記録集」をつくろう』になった。その後、鹿児島県では空襲体験を記録する民間の出版物は続々と出版されるようになった。主に記録集というような集団記憶が公開されるようになった。図2が示すように、民間記録の流れから見ると、「個人体験」から「集団体験」へという動きが見られる。要するに、個人の空襲体験を一冊の本にすることは数多くの体験者の体験談をまとめて出版するようになった。それによって、鹿児島市の空襲のイメージが具体化し始めた。民間記録の中、空襲自体に関する記録はほとんど公的記録としての「県史」、「市史」や「鹿児島市戦災復興誌」の内容を引用した。

3. 空襲記録の特徴

鹿児島市の空襲記録の特徴といえ、まず、空襲の概要や被害状況は公的記録を基準に定着したが、不十分という印象は強い。具体的に言うと、第一に、最後の二回の空襲に関しては、罹災戸数や人口が分かるが、具体的に死亡者や負傷者の記録はない。第二に、全体として、被害者の年齢層や職業などに関する記録や統計は一切ない。それに関して、当時の鹿児島市役所も爆撃されたため、一時資料の紛失が考えられる。

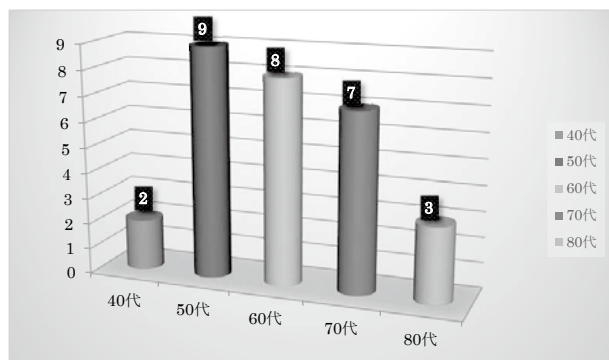
²² 同上、「発刊にあたって」。

²³ 生活協同組合コープかごしま編『忘れない あれから五〇年』鹿児島県立図書館所蔵、1996年。

²⁴ 「南日本新聞」、1972年1月14日。

そして、公的記録は空襲の詳細を記録していないため、民間記録は個人の空襲体験としてその部分を補足したといえる。

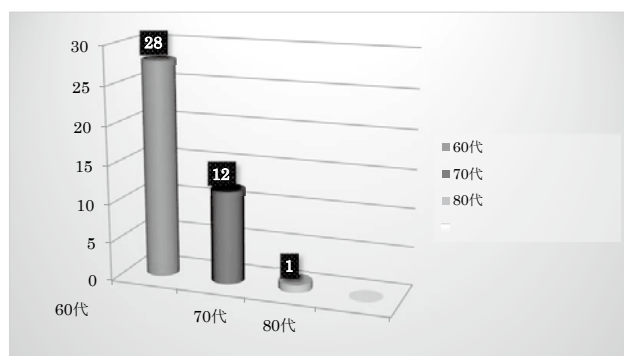
図3 『「鹿児島県の空襲戦災の記録」第一集（鹿児島市の部）』から見る記録者の年齢層



年代	年齢（歳）							
40代	42	44						
50代	50	52	52	52	52	53	54	57
60代	62	65	66	66	66	67	68	69
70代	70	71	73	74	76	77	78	
80代	81	82	88					

（筆者作成）

図4 『忘れない あれから五〇年』から見る記録者の年齢層



年代	年齢（歳）							
60代	60	60	60	61	62	62	63	64
	65	65	65	65	65	66	66	66
	66	66	66	67	67	68	68	69
	69							
70代	70	70	70	71	71	72	72	74
	75	77	78					
80代	86							

（筆者作成）

さらに、二つの記録集の『「鹿児島県の空襲戦災の記録」第一集（鹿児島市の部）』や『忘れない あれから五〇年』を例として、著者の年齢が記録した記録と本文の中から著者の年齢が分かる記録から分析する

と、図3や図4が示すように著者の年齢層の構成がわかる。『「鹿児島県の空襲戦災の記録」第一集（鹿児島市の部）』の記録から、1985年の時点で、年齢が分かる空襲体験者29人の中の18人が60歳以上で、17人が65歳以上である。65歳以上の方は全体29人の58%をしめている。『忘れない あれから五〇年』から、1996年の時点で、年齢が分かる空襲体験者41人の中の35人は65歳以上である。65歳以上の方は全体41人の85%を占めている²⁵。したがって、自分の空襲体験を話したあるいは記録した人の中で、高齢者が多いといえる。

最後に、民間記録の中で、戦争への嫌悪感、空襲の悲惨さや人はいかに死んだのかを強調した印象が強い。

おわりに

本稿は鹿児島市の空襲はどのように記録されているのか、そして記録する特徴を明らかにすることを考察した。結論として、第一に、空襲はどのように記録されているのかについて、公的記録としての『鹿児島県史』や『鹿児島市史』が記録した空襲概要や被害状況は定着した。民間記録は70年代から空襲記録が数多く出版された。内容的に個人の体験記録から、集団の体験記録を出版するようになったと見られる。第二に、記録する特徴は、まず、空襲の概要や被害状況は公的記録を基準に定着したが、数字が不十分という印象は強い。そして、内容的に民間記録は公的記録の補足になった。さらに、空襲体験を記録した人の中で、高齢者が多い。最後に、民間記録から戦争への嫌悪感が見られる。

戦後72年を経た今、戦争体験者の高齢化問題は避けられない。数多くの記録集を読むときに、平和への想いと戦争への嫌悪が感じられる。これは後世に伝えなければならない。歴史、記憶の継承は今後の重要な課題になる。公的記録を探り、発掘するのは重要な手段であるが、民間記録も歴史の再現に大きな役割を果たすことができる。

²⁵ 記録集の中で、親族などが代わりに語ったあるいは記録した場合がある。その場合は体験者本人の年齢を統計する。

鹿児島戦争・空襲に関しては、まだ多くの問題が残されている。本稿は一つの出発点として、鹿児島県全体の空襲記録、戦争遺跡、戦争記憶の継承などを今後の課題にしたい。

参考文献

小栗実 柳原敏昭「米軍資料にみる6・17鹿児島空襲…米軍第21爆撃機集団『作戦任務報告書』（試訳）」
鹿児島大学社会科学雑誌（19）、1996年9月

本田斉『鹿児島市戦災録 あれから十年』鹿児島県立図書館所蔵、1955年

勝目清『鹿児島市秘話 勝目清回顧録』南日本新聞社、1963年

柳本見一『激動二十年—鹿児島市の戦後史』毎日新聞西部本社、1965年

鹿児島県編『鹿児島県史 第五巻』淵上印刷株式会社、1967年

南日本新聞社編『鹿児島百年（下）大正・昭和編』春苑堂書店、1968年

鹿児島市史編さん委員会『鹿児島市史Ⅱ』文進社印刷株式会社、1970年

白石信虎『鹿児島駅被爆の日』三州写真製版社、1975年

鹿児島市戦災復興誌編集委員会『鹿児島市戦災復興誌』南日本新聞開発センター、1982年

鹿児島の空襲を記録する会編『「鹿児島の空襲・戦災の体験記録集」をつくろう』朝日印刷、1984年

鹿児島の空襲を記録する会編『「鹿児島の空襲戦災の記録」第一集（鹿児島市の部）』朝日印刷、1985年

かごしま県民生活協同組合編『語りつぎたい 戦争と空襲の体験』鹿児島県立図書館所蔵、1989年

生活協同組合コープかごしま編『忘れない あれから五〇年』鹿児島県立図書館所蔵、1996年

来日前後の日本人イメージの転換

—鹿児島大学中国人留学生を中心に—

人文社会科学研究所 地域政策科学専攻 文化政策コース 1年

趙 琳

人文社会科学研究所 地域政策科学専攻 地域政策コース 1年

金子 信一

1. 問題提起

外国人留学生について、文部科学省（2008）は日本を世界により開かれた国とし、アジア、世界との間のヒト・モノ・カネ・情報の流れを拡大する「グローバル戦略」展開の一環として位置付け、2020年を目途に30万人を目指す『留学生30万人計画』を発表した。日本学生支援機構（2017）は、毎年『外国人留学生在籍状況調査』を行っており、平成29年度外国人留学生数は約267,000人であったと報告している（Figure1参照）。

そして、出身地地域別留学生数はアジアが249,000人と全体の90%以上を占め、出身国（地域）別留学生数は中国人が107,000人と全体の40%（Figure2参照）を占めていると報告している（日本学生支援機構、2017）。

しかし法務省（2017）は、外国人であることを理由に、アパートへの入居を拒否されたり、外国人を排斥する趣旨の言動が公然とされたりしているという事案が発生していることを指摘している。そのため、日本人は外国人留学生の考え方や生活習慣等を理解し、偏見や差別をなくしていく努力をしなければ、世界により開かれた日本になることが難しいと考えられる。とりわけ、外国人留学生の中でも出身国別留学生数が最も多いのは中国人である。このことから、中国人留学生が日本人にどのようなイメージを持っているかを研究することは、異文化適応しやすくなるための方略が見出せること、信頼関係を築くための受容・共感がしやすくなることが挙げられる。したがって、中国人における対日イメージを研究することは偏見や差別を減らす一助になる可能性があることから、研究する意義があると考えられる。

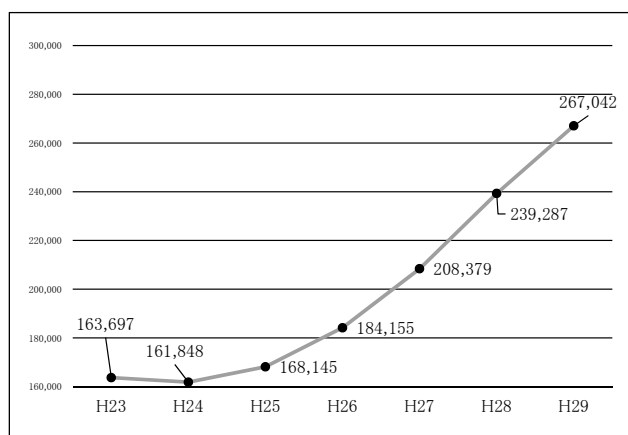


Figure1 外国人留学生の推移

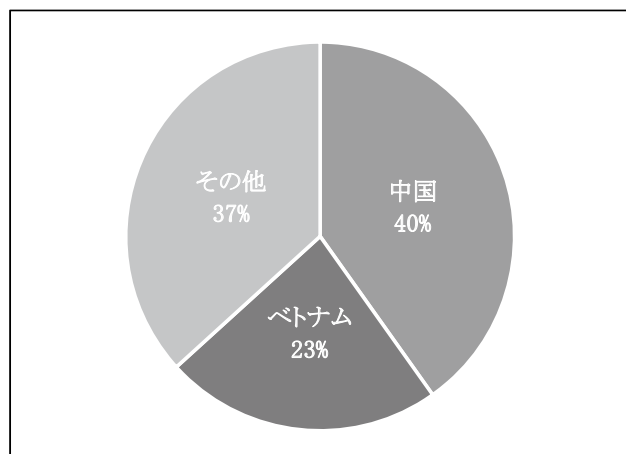


Figure2 出身国別留学生数

2. 目的

中国人における対日イメージ研究の一部は、異文化コミュニケーションという分野で行われている。異文化コミュニケーションの定義について、石井等（1997）は文化的背景を異にする人たちが、メッセージの授受により、相互に影響し合う過程であると述べている。そして、異文化コミュニケーション研究とは、①一般市民の日常生活様式を明らかにすること、②互いに異なる自文化の影響を強く受けている人々がコミュニケーション活動するとき、どのような困難さを抱えるかを把握し、どのように教育すると異文化理解が促進されたり異文化に適応しやすくなったりしていくのかという過程を明らかにすることである。

異文化コミュニケーションの研究分野は、コミュニケーション活動を行う人数によって分けられる（Table1参照）。この中で、中国人における対日イメージ研究は個人内コミュニケーションに属するステレオタイプという分野で行われている。ステレオタイプについて、W・リップマン（1987）は「多くの場合、われわれは最初に見てから定義づけるのではなく、最初に定義づけてから見る。外界の、あの途方もなく、ざわついた混沌のなかで、われわれは文化がすでに定義づけたものを選び出し、文化が類型化したままに、その選択されたものを知覚しがちである。」と説明している。つまり、ステレオタイプとは多くの人が共有している固定概念や思い込み等といった固定的・画一的

なイメージであると定義ができる。

ステレオタイプの特徴について、池田（2010）が私たちはステレオタイプを通して物事を見るため、その考え方に合わないものは、見ないようにしようとする」と述べている。このような物事の捉え方は、相手がどのような存在なのか瞬時に判断できることから、素早く行動できるようになるが、個人の多様性を見逃してしまう危険性があるのではないかと考えられる。

このことについて、近年の中国では日本語教育がステレオタイプの日本人イメージを形成しているのではないかという議論が盛んに行われている。このことについて、杉本（1996）は『日本語の教科書や参考書は「日本ではこうすることになっている」「日本人はこうのように考え、行動する」という趣旨の記述が多かったり、「正しい応答の仕方」「正しい女性の話し方」等の言語教育を通して、単一の規範を叩き込んだりしている。しかも、日本語の教員は日本社会や日本文化についての専門家ではなく、彼らの多くは安易に手に入る日本人論等をそのまま信じ込んでいる。このことから、日本語教育は日本や日本人についてのステレオタイプを日本語学生に伝授する役割を果たしがちである』と説明している。

つまり、中国における日本語教育は日本社会・文化の情報を提示し、解説するやり方が一般的であるが、この形で提示されている日本社会・文化はいわゆる「日本人論」の分野で作られて出されているステレオタイプの日本人イメージになっている可能性がある。そのため、中国人留学生は来日後に日本人と接触することで日本人イメージが転換すると考えられる。したがって、本研究では中国人留学生における来日前後の日本人イメージがどのように転換するのかを明らかにする。

3. 先行研究

3.1 中国人留学生における来日前の日本人イメージに関する研究

中国人留学生における来日前の日本人イメージについて、李（2006）は北京にある5つの大学に在学している大学生を対象にSD法を用いた質問紙調査を行った。その結果、「誠実な」「信頼できる」「優しい」「義理人情を重視」「心が広い」「謙虚」「親切」「責任

Table1 異文化コミュニケーションの研究分類

研究分類	研究内容
個人内コミュニケーション	脳の中の情報処理活動を研究
対人コミュニケーション	1対1で行われるコミュニケーション活動を研究
集団コミュニケーション	3人から15人程度で行われるコミュニケーション活動を研究
組織コミュニケーション	学校や会社で行われるコミュニケーション活動を研究
公的コミュニケーション	1人の送り手が多数の受け手を相手にするコミュニケーション活動を研究
マス・コミュニケーション	一定の送り手が不特定多数を相手にするコミュニケーション活動を研究

出典：石井等（1997）より

感がある」「堂々としている」「教養が高い」といった『誠実性』,「賑やか」「陽気」「ストレスが少ない」「ユーモアがある」「形式に拘らない」といった『社交性』,「男女平等」「発展途上国を差別しない」「排他的でない」といった『平等性』は中国人が日本人好感度に正の影響を及ぼしていることを示している。

夏(2010)は中国にある大学の日本語学習者を対象にSD法を用いた質問紙調査を行なった。その結果,肯定的日本人イメージは「真面目」「規律を守る」「時間厳守」「勤勉」「責任感がある」「細かい」「向上心」といった『勤勉性』,「親しみやすい」「友達になりやすい」「コミュニケーションがとりやすい」「温かい」「親切」といった『親和性』,「優しい」「誠実」「平和」「偏見がない」「心が広い」「配慮する」といった『寛容性』,「家族中心」「人間関係が濃密」といった『人間関係親密性』を示し,否定的日本人イメージは「はっきり言わない」「話し方が婉曲的」「感情を出さない」「考えが分かりにくい」「ケチ」「融通がきかない」といった『閉鎖性』を示している。

これらの研究から,中国人留学生における来日前の日本人イメージは,『社交性』『平等性』『勤勉性』『寛容性』『人間関係親密性』『閉鎖性』に関連する印象を抱いていると考えられる。

3.2 中国人留学生における日本人イメージの形成要因に関する研究

中国人留学生における日本人イメージの形成要因について,江(2014)は中国在住の日本語学習経験者を対象に質問紙調査を行なった。その結果,日本人との直接接​​触及び日本ドラマ・映画は日本人イメージ形成に正の影響を与え,中国の学校教育や国産戦争ドラマ・映画は負の影響を与えていることを示している。

その一方で,張(2016)は中国にある大学の日本語学習者を対象に質問紙調査を行なった。その結果,学習者は肯定的な日本人イメージを持っているが,学習が進むにつれて日本人イメージがややマイナスに変化することが観察されている。そして,日本人イメージが変化する背景には学習の進行に伴う日本人との接触増加が影響していることが示している。

これらの研究から,中国人留学生における来日前の

日本人イメージの形成要因は日本で作られたメディアから主に情報を入手している中国人は,ポジティブな日本人イメージを持ち,中国の学校教育及びメディアから主に情報を入手している中国人はネガティブな日本人イメージを持つ可能性がある。また,日本人との直接接​​触が増加することは日本人イメージがマイナスに変化することが考えられる。

3.3 中国人留学生における来日後の日本人イメージに関する研究

中国人留学生における来日後の日本人イメージについて,安(2010)は中国人非正規留学生を対象にPCA分析法を行なった。その結果,肯定的日本人イメージは『親切で礼儀正しい』『ルール遵守』『仕事熱心』を挙げ,否定的なイメージは『親切だが冷たい印象』『外国人への特別視』を挙げている。否定的日本人イメージについて,中国人留学生は日本人に対して,仕事を離れると個人行動を取る傾向があり人間関係が薄くなり冷たく感じること,日本人は外国人を差別すること,男女平等ではないと考えていることを示している。

田中等(2015)は東京及び東京近郊に居住する台湾出身者に面接調査を行なった。その結果,否定的日本人イメージは「過度な礼儀や形式を重視」「規則の遵守」といった『日本人気質への違和感』,「本音の分かりにくさ」「上下関係の厳しさ」といった『人間関係困難』,「世間体による束縛」「過度な自己表出の抑制」といった『過度な自己抑制』を示している。

これらの研究から,否定的日本人イメージは来日前より来日後のほうが複雑化する可能性がある。否定的日本人イメージが複雑化する背景には,日本人との直接接​​触が影響していることが考えられることから,中国人留学生は日本人と対人関係が築きにくいと感じていることが推定される。

3.4 中国人留学生における否定的日本人イメージや友人関係に関する研究

葛(2007)は中国人留学生が否定的日本人イメージを抱く原因について質問紙調査及び面接調査を行なった。その結果,日本人イメージとして「真面目」「規律を守る」「勤勉」といった『勤勉性』が見出され,

留学3ヶ月後には『勤勉性』の評価が低下していることが示している。その原因について、留学前は日本人への期待が膨らむことから、肯定的イメージが高くなる。しかし、留学後は留学前に抱いていたイメージと現実が異なることから、否定的日本人イメージが高まるのではないかと推測している。

戦（2007）は中国人留学生と日本人学生における友人関係について質問紙調査を行なった。その結果、両学生とも自国の友人には自己内面的なことを積極的に表出するが、相手国の友人には自己表出する意識が弱くなっていることを示している。また、中国人留学生は日本人学生に警戒的で防衛的な意識が強く、日本人学生は中国人留学生に優しく、常に気を遣っている姿勢が窺える。この特徴は自国文化の影響によって固定化されており、容易に変化しないことを明らかにしている。

小松（2016）は中国人留学生における否定的日本人イメージと友人関係について質問紙調査を行なった。その結果、中国人留学生における否定的日本人イメージについて、中国人留学生が日本人との友人関係に不満を抱き、その原因を日本人に帰属させる場合は、否定的日本人イメージをもつことによって「自己肯定感を保つこと」「メンタルヘルスの低下を防ぐこと」「留学生が問題を改善したり困難を克服する意思がなかったりすること」「留学生がこれ以上交流することを諦め、無力感を感じていること」があることを示している。

これらの研究から、中国での日本語教育では「優しい」「気を遣ってくれる」といった肯定的日本人イメージがステレオタイプの日本人イメージとなっている可能性があることから、これを仮説Ⅰとする。また、日本人は「優しい」「気を遣ってくれる」と表面的に良い人なのだが、親しい対人関係を構成しようとする、と、「自己内面を表出しない」「上下関係の厳しさ」といった『対人関係困難』を抱きやすいと考えられることから、これを仮説Ⅱとする。したがって、本研究では仮説Ⅰ及び仮説Ⅱが正しいか検証することとする。

4. 方法

4.1 調査対象者

日本に滞在している中国人留学生に、本研究の趣旨

及び方法の説明を行い、調査の協力を依頼する。中国人留学生15名（20代は11名、30代は4名）を対象とした。

4.2 調査時期 2017年11月

4.3 調査方法

研究者の一人がインタビュアーとなって対象者にインタビュー調査を行った。1人あたりの面接時間は24分～41分（平均29分）であった。インタビュー内容は対象者から許可を得てICレコーダーに録音した。質問項目は、①性別、②年齢、③日本文化の知り方、④来日前の日本人イメージ、⑤来日後の日本人イメージであった。

4.4 データ分析

面接によって得られた音声データは、テープ起こしてから日本語翻訳を行なった。翻訳されたデータは、内容を来日前後で区別・整理したうえで、日本人イメージを抽出した。分析方法は、佐藤（2008）質的データ分析を参考にした。

これはデータに即して分析カテゴリーを生成する質的分析法で、データそのものからカテゴリーを生成し、分析する方法である。手順は、翻訳されたデータを句読点毎にコード化する。生成されたコードは、コード毎に比較検討を行いながら、各々の類似性に基づいてコードを小分類・中分類・大分類へとカテゴリー化していく。このとき、コードの背景にある文脈を考慮するため、データに立ち返りながらカテゴリー化を行う。

なお、カテゴリーの分類の妥当性を検討するために、日本語教育を専攻している大学教員1名と臨床心理学を専攻している大学教員1名にコード化及びカテゴリー名について意見を求めた。

5. 結果

5.1 来日前に日本人を知る情報源について

来日前の中国人留学生はどのように日本の情報を得ているかについて、日本語教育の教科書及び授業は9人で33%、ドラマ・アニメ・映画等のメディアは8人で30%、インターネットは3人で11%、日本人教師ま

たは日本に留学したことがある中国人は3人で11%、漫画は2人で7%、イベント交流会は2人で7%であった（Table2 参照）。したがって、来日前の中国人留学生は日本語教育の教科書及び授業、ドラマ・アニメ・映画等のメディアから情報を得る人が多いことが示された。

Table2 来日前に日本人を知る情報源

情報源	度数	構成比
教科書・授業	9人	33%
ドラマ・アニメ・映画	8人	30%
インターネット	3人	11%
日本人教師・留学経験者	3人	11%
漫画	2人	7%
イベント交流会	2人	7%

5.2 来日前の日本人イメージの分類

中国人留学生における来日前の日本人イメージは、「まじめ」「時間厳守」「礼儀正しい」「細やか」「教養が高い」「勤勉」「残業が多い」といった『勤勉性』、「優しい」「人に迷惑をかけない」「サービスがいい」「人の気持ちを大切に」「親切」「思いやり」といった『寛容性』、「恋愛にオープン」「チームワーク」といった『人間関係親密性』、「融通利かない」「保守的」「コミュニケーションが足りない」「言葉が曖昧」といった『閉鎖性』、「冷たい」「親しみにくい」「いじめ」「上下関係が厳しい」「差別」といった『人間関係困難』、「目立たない」「オタクが多い」といった『地味』が抽出された（Table3 参照）。したがって、中国人留学生における来日前の日本人イメージは、『勤勉性』『寛容性』

Table3 来日前の日本人イメージ

カテゴリー	コード
勤勉性	「まじめ」「時間厳守」「礼儀正しい」「細やか」「教養が高い」「勤勉」「残業が多い」
寛容性	「優しい」「人に迷惑をかけない」「サービスがいい」「人の気持ちを大切に」「親切」「思いやり」
人間関係親密性	「恋愛にオープン」「チームワーク」
閉鎖性	「融通利かない」「保守的」「言葉が曖昧」「コミュニケーションが足りない」
人間関係困難	「冷たい」「親しみにくい」「いじめ」「上下関係が厳しい」「差別」
地味	「目立たない」「オタクが多い」

性』『人間関係親密性』『閉鎖性』『人間関係困難』『地味』というカテゴリー化が示された。

5.3 来日前における直接接​​触留学生と非接​​触留学生の日本人イメージの差異

来日前の日本人イメージについて、『勤勉性』『寛容性』『人間関係親密性』を肯定的イメージ、『閉鎖性』『人間関係困難』『地味』を否定的イメージと分類した（Table4 参照）。そして、直接接​​触留学生と非接​​触留学生における肯定的イメージと否定的イメージの回答率にカイ二乗検定を行うと、有意差が認められた（ $\chi^2=9.267, df=1, p<.01$ ）（Table5 参照）。この結果から、直接接​​触留学生は非接​​触留学生より否定的日本人イメージを抱いていないことが示された。

Table4 直接接​​触留学生と非接​​触留学生の日本人イメージの差異

	直接接​​触留学生	非接​​触留学生	χ^2
肯定的イメージ	94%	73%	n.s.
否定的イメージ	6%	27%	**

n.s.：非有意，**： $p<0.01$

Table5 日本人イメージカテゴリーの差異

	直接接​​触留学生	非接​​触留学生	χ^2
勤勉性	67%	43%	*
寛容性	26%	27%	n.s.
人間関係親密性	2%	2%	n.s.
閉鎖性	6%	12%	n.s.
人間関係困難	0%	12%	*
地味	0%	4%	*

n.s.：非有意，*： $p<0.05$

また、直接接​​触留学生と非接​​触留学生における日本人イメージカテゴリーの回答率にカイ二乗検定を行うと、有意差が認められた（ $\chi^2=12.304, df=5, p<.05$ ）。この結果から、直接接​​触留学生は非接​​触留学生より『勤勉性』が高く、『人間関係困難』『地味』が低くなることが示された。

5.4 来日後の日本人イメージの分類

中国人留学生における来日後の日本人イメージは、「まじめ」「ルールに厳しい」「知らない人でも会釈する」といった『勤勉性』、「マナーがいい」「優しい」「親切」「サービスがいい」といった『寛容性』、「友好的」「チー

ムワーク」といった『人間関係親密性』,「融通がきかない」「お金に細かい」「親切ではない」「利己的」といった『閉鎖性』,「人間関係に距離がある」「縦社会」「コミュニケーションが少ない」「曖昧さ」といった『人間関係困難』,「教養の低さ」「礼儀正しくない」といった『日本人気質の違和感』,「自殺率が高い」といった『過度の自己抑制』が抽出された(Table6 参照)。したがって, 中国人留学生における来日後の日本人イメージは『勤勉性』『寛容性』『人間関係親密性』『閉鎖性』『人間関係困難』『日本人気質の違和感』『過度な自己抑制』というカテゴリー化が示された。

Table6 来日後の日本人イメージ

カテゴリー	コード
勤勉性	「まじめ」「ルール遵守」「知らない人でも会釈する」
寛容性	「マナーがいい」「優しい」「親切」「サービスがいい」
人間関係親密性	「友好的」「チームワーク」
閉鎖性	「融通がきかない」「お金に細かい」「親切ではない」「利己的」
人間関係困難	「人間関係に距離がある」「縦社会」「コミュニケーションが少ない」「曖昧さ」
日本人気質の違和感	「教養の低さ」「礼儀正しくない」
過度な自己抑制	「自殺率が高い」

5.5 来日前後の日本人イメージの差異

中国人留学生における来日前後の日本人イメージについて,『勤勉性』『寛容性』『人間関係親密性』を肯定的日本人イメージ,『閉鎖性』『人間関係困難』『日本人気質の違和感』『過度の自己抑制』を否定的日本人イメージと分類した。そして, 中国人留学生における来日前後の肯定的日本人イメージと否定的日本人イメージの回答率にカイ二乗検定を行なった結果, 有意差が認められた($\chi^2=4.749, df=1, p<.05$) (Table7 参照)。このことから, 中国人留学生は来日前のほうが来日後より肯定的日本人イメージが増加し, 否定的日

Table7 来日前後における日本人イメージの差異

	来日前	来日後	χ^2
肯定的日本人イメージ	73%	50%	*
否定的日本人イメージ	27%	50%	*

* : $p<0.05$

本人イメージが減少することが示された。

また, 中国人留学生における来日前後の日本人イメージカテゴリーの回答率にカイ二乗検定を行った結果, 有意差が認められた($\chi^2=16.842, df=7, p<.01$) (Table8 参照)。このことから, 中国人留学生は来日前より来日後のほうが『勤勉性』が減少し,『人間関係親密性』『閉鎖性』『日本人気質の違和感』『過度な自己抑制』が増加することが示された。

Table8 日本人イメージカテゴリーの差異

カテゴリー	来日前	来日後	χ^2
勤勉性	42%	9%	**
寛容性	27%	29%	n.s.
人間関係親密性	4%	12%	**
閉鎖性	12%	26%	**
人間関係困難	12%	15%	n.s.
地味	4%	0%	n.s.
日本人気質の違和感	0%	6%	**
過度な自己抑制	0%	3%	**

n.s. : 非有意, ** : $p<0.01$

5.6 対人関係に関するインタビュー内容

- ・自分は一人で熊本城を見に行ったとき, 地震の被害で一部閉鎖になっているので, 見られなくて残念だった。しかし, 私の話しを聞いた警備のおじさんはとても親切で, せっかく来たのでもう少し近寄って見られるようにと地図で別のルートを教えてくれた。とても感動した。
- ・大阪で地下鉄の乗り方が分からない自分を見て, 親切なおじさんがいろいろ教えてくれた。向こうから困っている自分に話しかけてくれたので, 助かった。この調査から, 中国人留学生は関係性が希薄な日本人に「親切」「優しい」といった肯定的日本人イメージをもつことが示された。
- ・日本に来て二年以上経つが, 学校とバイトでしか日本人と接することはない。バイトで親しくなった女の子とLINEの連絡先を交換し, 雑談等といったお喋りもするが, 一緒に食事をしたり遊んだりすることはない。
- ・周りの日本人とは親しみにくいと感じている。例えば, バイト先で中国人がいたら, 中国人同士で親しくなる。今バイト先に中国人が自分しかいないから,

年の近い契約社員の女の子と親しくなり、休憩時間に一緒に散歩したりもするが、何でも話せる仲でもない。日本人の知り合いとは、LINEで写真を送ったりするようなことはしない。友達でも、中国の考えでは「うわべだけの付き合い」かな。常に距離感を感じ、溶け込みにくさを感じている。

この調査から、中国人留学生は親しい間柄に踏み込もうとする段階で日本人と対人関係を築くにくさを感じていることが示された。

5.7 上下関係に関するインタビュー内容

- ・先輩と後輩の関係がはっきりしている。以前から知っていたが、実際の体験を通して、理解が深まった。部活は専門も学年も違う学生が集まる小さい社会になっており、縦社会の表れだと思う。特に次のエピソードがとても印象深かった。それは自分からお土産を配った時の話だが、自分は近くにいる人からあげればいいと思って、親しい一年生にあげようとしたが、相手は「三年生の先輩にはあげたの」「はい、あげた。」「二年生にもあげたの」「はい、あげた」とちゃんと確認してから、手に取った。
- ・ある日、親しくなった先輩から何か言われて、よく聞き取れなかった自分は自然に「なに？」と聞き返した。自分の性格の問題もあるかもしれないが、親しくなった以上、言葉遣いとかも前のように気にしなくていいと判断した。それを聞いた先輩は「何って。先輩だよ。失礼だなあ。」と怒った。もちろん、普段自分は先輩に対して丁寧体を使って、先輩は普通体だ。このことはとても印象深く、先輩はいつまでたっても先輩というように先輩と後輩の關係の厳しさがわかったような気がする。

この調査から、中国人留学生が日本人の上下関係に接する機会は部活やゼミであることから、親しい人間関係を築く必要がある状況のときに上下関係の厳しさを感じていることが示された

6. 考察

来日前の直接接​​触留学生は非接​​触留学生より肯定的日本人イメージが高く、張（2016）の研究と逆の結果

となった。このような結果になった可能性について、張（2016）は態度変容の背景には、学習の進行に伴うインターンシップの工場現場やアルバイト先での日本人との接​​触増加を挙げている。そして、李（2006）は、中国人はあえて日本人と交流するよりも、中国人同士の交流がしやすいと述べている。つまり、インターンシップやアルバイト先で日本人と会っていても、ほとんど交流することなく、中国人同士で交流していることが多かったことからではないかと推測する。

しかし、直接接​​触留学生より非接​​触留学生の方が否定的日本人イメージのカテゴリー数は多い。具体的に、直接接​​触留学生の否定的日本人イメージは『閉鎖性』のみに対して、非接​​触留学生の否定的日本人イメージは複雑になっている。夏（2010）は学年が上がるにつれて『開放性』のイメージが低くなることを示している。つまり、中国人は直接日本人と接していると、「融通がきかない」という印象を持つようである。しかし、どうして「融通がきかない」という印象を持つのかということについてはインタビュー調査の中で扱われていなかった。つまり、「日本人は融通がきかない」について、日本人に接したことがある中国人は誰もが知っていることなのかもしれない。したがって、「日本人は融通がきかない」はステレオタイプの見方をしている可能性がある。

中国人留学生は来日前のほうが来日後より肯定的日本人イメージが増加することが認められた。このことについて、留学前は日本人への期待が膨らむことから、肯定的イメージが高くなるといった葛（2007）の研究と同様の結果であった。本研究は中国人留学生における肯定的日本人イメージの構成要素を特定していることから、中国人留学生は来日前に日本人を『勤勉性』『寛容性』『人間関係親密性』があると期待していることが示された。そして、中国人留学生の33%は中国の日本語教育から日本人の情報を得ていることから、中国の日本語教育は『勤勉性』『寛容性』『人間関係親密性』といったステレオタイプの日本人イメージを形成している可能性がある。

また、来日後のほうが来日前より『勤勉性』は減少し、『閉鎖性』『日本人気質の違和感』『過度な自己抑制』が増加していることが認められた。このことから、

留学後は留学前に抱いていたイメージと現実が異なることから、否定的日本人イメージが高まるといった葛(2007)の研究と同様の結果であった。つまり、中国人留学生は来日後に日本人と接触したことによって、日本人が『閉鎖性』『日本人気質の違和感』『過度な自己抑制』といった特徴をもっていることに気付き、理想と現実の違いを感じたのだと考えられる。

インタビュー内容から、中国人留学生は関係性が希薄な日本人に肯定的日本人イメージをもつが、日本人と親しい間柄になろうとする段階で対人関係を築きにくさを感じるせいで否定的日本人イメージへ転換されていくことが示された。小松(2016)は中国人留学生が日本人との友人関係に不満を抱き、その原因を日本人に帰属させる場合は、否定的日本人イメージをもつことによって「自己肯定感を保つこと」「メンタルヘルスの低下を防ぐこと」等があると述べている。このことから、中国人留学生は日本人と対人関係が築きにくい原因が『閉鎖性』『日本人気質の違和感』『過度な自己抑制』にあると思うことで、自分達の精神的健康度を保持している可能性がある。

その一方で、インタビュー調査では親しい人間関係が築きにくいと感じている要因に上下関係が示されている。しかし、来日前後の日本人イメージの差異では上下関係に関する『人間関係困難』に有意差が認められず、むしろ『人間関係親密性』に有意差が認められる。戦(2007)は両学生とも自国の友人には自己内面的なことを積極的に表出することを示している。インタビュー内容において、上下関係を感じる瞬間は部活やゼミを挙げていることから、日本人同士のやり取りを見ていて、人間関係の親密性を感じたのではないかと考えられる。また、『人間関係困難』に有意差が認められなかったことは、日本人に上下関係があることは来日前に知っており、来日後の体験・経験を通じてどのような上下関係があるのかということが明確化されたのではないかと推測される。

したがって、中国人留学生は来日前に中国の日本語教育によって『勤勉性』『寛容性』『人間関係親密性』といったステレオタイプの日本人イメージを抱くものの、来日後に日本人と接触することで、『勤勉性』という日本人イメージが下方修正され、『閉鎖性』『日本

人気質の違和感』『過度な自己抑制』といった否定的日本人イメージに転換されることが明らかとなった。そして、否定的日本人イメージへの転換は中国人留学生の精神的健康度を保つ機能があることが示唆された。

最後に、中国の大学で日本語学習歴を持っているとの共通点から、教科書や日本語の授業、教師の影響が大きいと考えられる。この点について、稿を改めて中国における日本語教育の教材や授業の分析を行うことを今後の課題とする。

参考文献

- 安龍洙 2010「外国人の対日観に関する研究：中国人非正規留学生の場合」『茨城大学留学生センター紀要』8, pp. 1-17
- 池田理知子 2010『やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ よくわかる異文化コミュニケーション』ミネルヴァ書房
- 石井敏・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔・江草忠敬 1997『異文化コミュニケーション・ハンドブック』有斐閣
- Walter Lippmann著・掛川トミ子訳 1987『世論』岩波書店
- 夏素彦 2010「中国における日本語専攻学習者の日本人イメージ：日本語学習動機との関連を中心に」『言語文化と日本語教育』39, pp. 112-121
- 葛文綺 2007『中国人留学生・研修生の異文化適応』溪水社
- 江暉 2014「現代中国人が抱く対日イメージの形成における情報源の役割」『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』87, pp. 53-70
- 小松翠 2016「中国人留学生の友人関係不満に関する原因帰属と日本人イメージの関連について」『高等教育と学生支援：お茶の水女子大学紀要』7, pp. 128-139
- 佐藤郁哉 2008『質的データ分析法—原理・方法・実践—』新曜社
- 杉本良夫 1996「日本文化という神話」『日本文化の社会学』井上俊・吉見俊也等編, 岩波書店

- 戦旭風 2007「友人との付き合い方から見る中国人留学生と日本人学生の友人関係」『留学生教育』12, pp. 95-105
- 田中詩子・岡村郁子・加賀美常美代 2015「日本における台湾出身者の日本イメージ：日本語上級話者を対象に」『お茶の水女子大学人文科学研究』11, pp. 27-41
- 張勇 2016「中国人日本語学習者の対日態度の経時的変化と情報源の影響」『日本言語文化研究会論集』12, pp. 19-34
- 日本学生支援機構 2017「平成29年度外国人留学生在籍状況調査結果」日本学生支援機構
- 法務省人権擁護局 2017「平成29年度版人権の擁護」法務省
- 文部科学省 2008「『『留学生30万人計画』の骨子』と
りまとめの考え方」文部科学省
- 李洋陽 2006「中国人の日本人イメージに見るメディアの影響—北京での大学生調査の結果から—」『マス・コミュニケーション研究』69, pp. 22-40

庶民金融の転換—タノモシとクラウドファンディング—

人文社会科学研究科 地域政策科学専攻 地域政策コース 1 年
江 駿
人文社会科学研究科 地域政策科学専攻 島嶼政策コース 1 年
竹下 友章

はじめに

庶民金融とは、担保力が弱く信用が低い個人や零細企業でもアクセス可能な金融のことを指すが（森 2017）、我が国では中世からタノモシという回転講（rotating saving and credit associations）が存在した。後に述べるように営業的なタノモシは近代化を通じて企業化し、法律上の位置づけを得、現在の第二地銀の由来ともなっているが、なお庶民の間の個人的な繋がりの上に立脚し、現代も存続しているものもある。しかし、それは民間のインフォーマルな習慣であるため記録に残りにくく、その実態は必ずしも明らかではない。他方、フィンテックの進歩により近年庶民金融の世界にも新しい潮流が発生した。それがクラウドファンディングである。これも金融アクセスが制限された人や企業が資金調達をする手段として脚光を浴びている。しかしその新しさ故にその実態・仕組みが充分認知されているとはいいがたい。

数百年の歴史を持つタノモシには存続を可能にさせた何らかの強みがあるはずで、それはクラウドファンディングの将来の発展可能性に何からのヒントを与えないだろうか。また、タノモシにフィンテックが結びつく可能性はないであろうか。こうしたことをリサーチクエスションに、本稿はこの庶民金融の最古の形と最新の形の内容を明らかにし、この対照的な二つの金融形態を対比することで、庶民金融の転換を論じるものである。

1. 奄美におけるタノモシの転換・変容

1.1 庶民金融タノモシのフォーマル化

本邦における庶民金融の最古の形態の一つはタノモシ¹と呼ばれるものである（森 2017）。それは数人から数十人規模の小グループで形成され、定期的に会合を開き、全員が掛金を収め、入札・籤引・相談等を通じて会合ごとに一人が受領する、という形態が基本である（林他編 1991 p.611）。元々は一般民衆同士が無利子・無担保でとり行う相互扶助的な性格が強いものだったが、近世に至り、同じ中世に発生した「無尽」、および「講」と混同・合流し、それに伴いその中には様々なバリエーションが誕生する。もともと、「無尽」は現代の質屋にあたる土倉が有利子・有担保金融を行ったものであり、また「講」は仏典講話の会合だったのが、檀家団体による伽藍仏閣の建立修繕維持のため資金拠出を通じ、金融機能を帯びたものである（朝日相互銀行・行史編集委員会 1980, pp.1-2）。だが近世にはそれらは同義語として流通し（ibid；国史編纂委員会 1992, p.620）、特定個人の救済、寺社建立・公共事業の資金調達、射幸、利殖など、目的に応じ様々な形態が派生している（日本民族学協会編 2004, pp.892-894；伊藤 2017）。

さて、近代的銀行制度が導入されて以降はどうか。明治以降、長らく銀行は信用力・担保力のある企業や資産階級を相手にし、一般庶民や中小零細企業を大して相手にしてこなかった。例えば1930年代では近代的金融機関貸出総額235億円のうち、一般庶民向けの割合は10%程度である一方、民間タノモシの契約高は

1 表記には頼母子（講）、憑子、憑支などがある（林他編 1991, p.405）。

50億～100億に上る推定されている（日本民族学協会編 2004, p.893）。明治以降もタノモシは庶民金融の王座を占めるものであったが、他方で庶民同士でのインフォーマルな資金融通の形態ばかりではなく、営業的なタノモシはよりフォーマルな形への変貌も見せてゆく。明治期、合資会社をはじめ様々な法人形態での営業無尽が現れ始め、大正時代（1915年）には無尽業法が成立し、金融業として法的な位置づけが与えられる。無尽会社は1951年、相互銀行法が制定されたのを契機に相互銀行へ転換し、現在、相互銀行は第二地方銀行として普通銀行のひとつとなっている（国史大辞典編集委員会 1992, p.620；金子 2017）。また他方1949年には中小企業等協同組合法により信用組合や事業協同組合が誕生し、1950年には中小企業信用保険法施行、1951年には信用金庫法、1953信用保証協会法が施行されている。時代が下るにつれフォーマルな庶民向け金融機関の整備が進み、かつて銀行から金融排除されていた層がフォーマルな金融制度のなかへ包摂されていく。

1.2 奄美に現存するタノモシ

時代が進むに連れ、インフォーマルな庶民金融としてのタノモシは、すっかりフォーマルな形へ転換し、またその役割が別の金融機関に取って変わられてしまったのだろうか？じつは、現代においてもタノモシが盛んである指摘される地域がある。それが沖縄と奄美である。例えば、地域社会の日韓比較を行う高橋（1989, p.123）は、沖縄・奄美を「南島」と一括し、その出身者は盛んに同郷者出身団体を形成しタノモシや模合²を営んでいると指摘する。また『日本大百科全書（ニッポニカ）』中でも、今も沖縄と奄美地方では、本土におけるタノモシにあたる模合が盛んであると解説される（野口 2017）。また民俗学者・恵原義盛が記した『奄美生活誌』には以下のように記される。「奄美の村における共助の風習の一つにコウがあります。……殊に現在のコウは殆んど相互金融組織のようなものになっています」（恵原 1973, p.22）。また、新聞記者・神谷裕司が記した『奄美、もっと知りたいーガ

イドブックが書かない奄美の懐』というエッセイでも、「いまでも盛んに行われている頼母子講の一種『模合』、つまり庶民金融も、相互扶助に基づく場合が多い」（神谷 1997, p.96）と言及されている。

ところで、沖縄と奄美はタノモシ（または模合）が現代社会でも続いているという点で共通するのだが、どうやら学問上の取り扱いには大きな格差があるようだ。というのも、現代沖縄の模合をテーマとした研究は多数見つかるのだが（北島 1972；北島 1973；生地 2001；片多 2006；遠藤 2007；池上；2012）³、現代奄美のタノモシをテーマとした先行研究は皆目見当たらないのである。こうした現状は、奄美は文化的に沖縄の従属物のように扱われがちだったこととも関連しているかもしれない。ともあれ、今まで十分に光が当たってこなかった部分に光を当てることは、知の発展に対するいくばくかの貢献が期待できよう。そこで本節では現代奄美のタノモシにフォーカスしその実態や仕組みに迫る。

1.3 関連先行研究における奄美のタノモシ

上述の通り奄美のタノモシ自体をテーマとした研究は管見に入る限りないのだが、広く奄美の文物を取り扱った文献や別テーマの研究の中に、断片的ながら奄美のタノモシに触れているものを見つけることができる。ここではそうした書籍・論文のレビューを行う。まず先に挙げた文献から見ていこう。恵原（1973）によるタノモシの説明は簡潔ではあるが、奄美のタノモシ（コウ）の内容についても次のような若干の説明をしている。昔のコウは「親」（コウを組織するもの）を救済するもので、例えば長患いをしたとか、不慮の災害で出費が生じたとか、家普請のときなど平素にはない多額の出費が生じた際に助けを乞う意味で設けられ、コウを発足する晩、親は自分の豚をつぶし加入方に馳走し、二回目以降入札制となる（恵原 1973, p.22）、かつては、発起人であり優先的に初回給付を受ける「親」の救済を主目的とするものであったとある。さらに二回目以降の給付者決定について「親が受けた金額よりはるかに下廻る金額でないと落ちないのは言う

2 沖縄や鹿児島におけるタノモシの呼称。

3 また出口（2001）は戦後沖縄の文化構造をテーマとした論文であるが、大いに模合にフォーカスしている。

までもありません」(ibid)とある。この記述だと入札は受取額の低さを競うものと読め、一人あたりの掛け金の低さを入札対象としたのではないかと考えられるが、これ以上の記述はない。これが現在は「殆んど相互金融組織のようなもの」になっているというが(ibid), この文脈で言う「相互金融組織」とはどういうものか、という点には説明がない。

奄美の風習について記された私家本『小湊むんがたり一写真にみるふるさとのおき昔一』にもタノモシの記述が見られる。それによると、いつごろから始まったか分からないが、現金収入が少なく金融機関が発達していない昔、不時の出費に多額の金銭を工面する方法として利用されていて、講元が現金の必要なとき人数をそろえ、豚をつぶしてもてなし、その後も決められた数量の酒でもてなすが、かわりに初回の給付を受けるという(隣 1993, p.116)。そして問題は次の記述である。

講は下がり講で、2回目からは入札で決めて、落札者は講員から入札金額だけをもらい、次回からは掛金を満会まで支払う仕組みである。戦後は掛金に上乘せして入札する上がり講が始まり、現在も行われている……落札者は落札済み者からは入札金額を、未落札者からは掛金をもらい、次回からは入札金額を満会まで払う仕組みである、今は主婦たちが、月1回の楽しみに利用されている[sic]。(ibid)

おそらく下がり講では入札によって給付額の低さを競ったのだらうと推定できる。しかしこれだけの説明では、入札方式は公開入札方式なのか封印入札方式なのか、また近世薩摩のタノモシの研究である芳(1980)によると、近世本土のタノモシでは、入札制が加味されると会の進行に伴って掛金が逓減する方法が取られるようになったというが(ibid, p.20), 奄美のタノモシの掛金は定額法なのか逓減法だったのか、新しい落札額がそれ以前に落札した者が払う掛金より低くなることもあるだらうが、その差額は誰が取得するのか、主婦の楽しみとなり親の救済という意味合いが薄まったと考えられる現代タノモシに親が存在するのか等、

この記録からではタノモシの仕組みについて確定できないことが多い。文化の記録という観点から言えば、その文化が廃れた後でも再現可能なほどのアーカイブを作れることを理想的だろうが、少なくともこの記述だけではタノモシを知らないものがその仕組みを理解したり、後に再現したりできるほど詳しいものとは思えない。

田島(1995)は名瀬にある郷友会の実態調査をテーマにした研究だが、そのなかでタノモシの調査も行っている。それによると、アンケート調査した名瀬の55郷友会のうち内部組織にタノモシをもっている会は12.7%, タノモシを行っていると回答した会は41.9%存在し、タノモシの構成人数は10人台が6割、20人台が3割、そして近年は「貯金会」とも呼ばれるという(ibid, p.17-18)。しかしタノモシのシステム自体にはほとんど言及はなく、「月一回、5000円程度の積立で行われている」(ibid., p.17)とだけある。

上にも触れた神谷(1997)のタノモシへの言及は数行程度ではあるが、次のように内容を説明する。

親戚や友だちなど十数人で一口数千―数万円を「預金」し、家の新築や子どもの進学など必要なとき落とす。もちろん一口百万円にもなる、とばく的なものもあるようで、巨額の借金を背負った人の話も聞いたことがあるが、多くは、庶民同士で助け合う生活の知恵だ。この模合にヤマトンチュが入ることは難しい(ibid, p.96)

このように90年代時点で現代タノモシに言及しており、この時代でも身内によって営まれるインフォーマルな庶民金融としてのタノモシが存続していることが確認できる。しかし、給付者はどのように決定するのか、利息の有無やその決定方法はなにか、「預金」という語を使用しているが、積立方式は採用しているのか、親は存在するのか、などその実態に関する疑問は尽きない。

須山(2003)も名瀬における郷友会の研究であるが、その中でタノモシに数行程度ではあるが触れている。それによると(1)かつては入札方式であり、生活資金や零細企業の運転資金を融通する機能を有してい

た、(2) 中には資金を積み立ててシマ出身者への奨学金として運用しているものや、余剰金や利息を基金とし入院見舞金や新築祝い金として運用しているものもある、(3) 現在は形を変え旅行資金の積立や輪番の自宅会食という親睦を主目的とする活動になっている、ということが紹介されている (ibid, p.43, p.56)、庶民金融組織から親睦組織への転換や、資金の積み立てを取り入れ共済保険的または基金的な運用もなされていることが分かる。

鄭 (2010) では、宇検村芦検におけるUターン研究の中で、親睦会の内部での金融機能が形骸化したタノモシについての二つの事例が簡単に紹介されている。ひとつは1931未成年生まれで集まる「ひつじ会」であり、そこでは毎月1万円積み立て、旅行などで共同消費するか、または使用しない場合は年末に払い戻されるものである。今ひとつは「明老会」であり毎月会費1000円と食事代3000円を徴収し、余った資金が積み立てられ集団旅行の財源に当てられるというものである (ibid, p.88)。しかし、庶民金融機能をもっていたころのタノモシがいかなるものだったかには触れていない。

季 (2015) による奄美の婦人会の研究では、戦後復興期に婦人会がタノモシを利用し託児所の設置や風呂釜の購入に用立てた事例が紹介されているものの (ibid, p.57, p.68)、このタノモシがどんなシステムだったかについての説明はない。

以上が、わずかでも現代奄美のタノモシに言及している文献の記述をまとめたものである。おおよその形や歴史的変遷などは見えてきたものの、やはり断片的な情報の寄せ集めでは、どんな現代奄美のタノモシがどんなシステムなのか未経験の者が想像するにはいささか情報量が少ないと思われる。

1.4 フィールド調査による事例研究

以上のような社会学的・民俗学的文献では、研究分野上な問題か、タノモシの金融システムそれ自体に関する記述が少ない。そこでより詳細な情報を集め、現代奄美でのタノモシの仕組みを詳らかにするため、聞き取り調査を行った。

1.4.1 事例①元織り子のKさん

Kさんは70代女性、元紬織り子で、1980年代初頭まで「親」としてタノモシを行っていた方である。インタビューは2017年12月23日、Kさんのお宅で3時間以上にわたり自由形式で行った。以下、伺った話をタノモシの仕組みについて中心にまとめる。

タノモシの発起人であり幹事役である人を「親」、それ以外の加入者を「子」と呼ぶ。はっきり覚えているわけではないが、Kさんの家庭には財産があったため、友人から「やらんね」と誘われたのが親となる切掛けだったとはずだという。タノモシは月一回親の家で行われる。その会合では親がお茶などを振る舞う。親は大学ノートで帳簿づくりを行うが、沖縄で広く流通する「模合ノート」⁴は聞いたことも見たこともないという。その帳簿以外は一切記録に残さず口約束で行われた。会合には代理を立てることも可能である。メンバーは10人程度であり、ご近所さんや友人で構成された。そこで全員毎月定額の掛金を支払う。たいてい月1~2万が相場で、Kさんのタノモシは月2万だった。その月の掛金の総額を一人が受け取るのだが、初回は親が無条件で受け取る。二回目以降は入札で決められる。まだ給付を受けていないメンバー全員が紙切れに利息の支払意志額を書き親に提出する。入札者同士では互いの入札額を見ることはできない (封印入札方式)。もちろんもっとも高い利息を提示したものが落札する。落札者はお金を受け取れる代わりに、次回以降、掛金に利息を加えて終わるまで支払わないといけない。落札者は掛金と利息を総取りし、お金が積み立てられることはなかった。また落札したお金からお茶代を2000円ほど親に渡すルールであった。目先の資金が欲しいひとは高い利息額を提示するが、高い場合2万円のタノモシで6000円利息を提示する人もいたという。利息は低くても2000円切らない程度はついた。そのように毎月一人落札し、全員が給付を受けたら終了する。保証人・担保は不要ではあるが、もし加入者 (子) が支払えなくなった際は親が責任を取って肩代わりしなければならなかった。また一人で複数口掛けでもよかった。

4 出口 (2001, p.45) を参照のこと。

加入の目的は利殖や生活上の大きな出費の準備であった。冠婚葬祭や進学に加え、盆・正月にも資金需要が高まり利息が高騰したという。

Kさんは子の一人が夜逃げしたことで大いに損害をこうむり、それからタノモシから手を引いた。その経緯を以下に略記しよう。ある人が5口ほど掛けていた。その人は自分が落札するまでは毎回会合に参加し掛金を支払っていたが、自分が落札したあと蒸発してしまった。親であるKさんはその人の分を、利息を含めて肩代わりした。メンバーからは利息までは払わなくていいと言われたが、Kさんは「みんな利息を楽しみにして参加しているから」と固辞した。Kさんはそのタノモシが終了すると共にタノモシを辞めた。その人は他のタノモシでも同じことをやっていた。またKさんに他のタノモシに入ることを促し、代理で会合に出るといってKさんから掛金を徴収していた。Kさんがその会合に顔を出したいといってもはぐらかしていた。奄美は狭い社会であり夜逃げした人は二度と島に戻ってこれないだろうとKさんという。

1.4.2 事例②Kさんの妹さん

Kさんには妹さん（以下Ksさんと表記する。）が参加するタノモシについても教えて頂いた。これは先行の研究が指摘する形骸化したタノモシに相当する事例である。

Ksさんは、同年代で構成される友だちグループに所属しており、そのメンバーは年々減って現在6名である。そのグループには〇〇会というふうな名前が付けられている。活動は月一回のお食事会であり、食事会は個人宅ではなくレストランで開かれる。名瀬のレストランは大体行き尽くしたという。そこで形が変わったタノモシが行われている。掛金は毎月5千円で、親は存在しない。利息もなく、取り番決定方法は籤引である。

1.4.3 事例③Yさん（60代男性、ケアマネジャー）

Yさんは山間集落に住むケアマネジャーの男性である。インタビューは2018年1月10日、電話取材という形で行った。

基本的なシステムはKさんと同じで、友人同士で小

数のグループを作り、毎月会合を開き、そこで定額の掛金を掛け、親は初回無利子で掛金を受け取り、二回目以降は利息額で封印入札を行って決める。月に一人受け取り全員一回受け取ったら満会となる。取りまとめ役の親には信頼されている人しかならず、加入を希望する人をメンバーに入れるかどうかについても親の判断が大きいという。Kさんと違う部分は取り番決定するのに籤引や合議を併用しているところである。どういう使い分けをしているかという、会が進むと目先の資金が欲しい人が全員落札してしまい、利息がほとんどゼロとなるが、そこに到達した時に籤や話し合いという方法が採用されるという。Kさんは利息が2000円切ることがなかったのと比べれば、資金需要が薄れ形骸化が始まっていると言えるかもしれない。

グループによっては、親のいない無利息の親睦目的タノモシや、食事会や積み立てて旅行に行くものもあるという。そうした形骸化したタノモシは60歳前後の比較的若いグループでボランティア活動の担い手でもあるという。

1.5 生活者用タノモシの変容

さて、ここまでの文献情報とフィールド情報を総合しよう。これまでの文献サーベイ・フィールド調査の結果はほとんど生活者にとっての金融としてのタノモシに関するものであった。これまで見たそうした現代奄美のタノモシには大きく分けて次の4パターンに分けられよう。

- [1] 親救済的タノモシ
- [2] 相互金融組織タノモシ
- [3] 無利息タノモシ
- [4] 会費・基金化したタノモシ

[1]親救済的タノモシは恵原（1973）や隣（1993）で「昔」の形態として指摘されたものである。戦前から存在する。今回の調査ではこの二つの文献以上のことは不明であるが、災害や長患いなどで不慮の出費に迫られた際に、地域社会がその人に無利子ローンを提供する枠組みといってよい。

[2]相互金融組織タノモシについては、今回インタ

ビュー調査したKさんとYさんの事例が当てはまる。隣（1993）は戦後に始まった仕組みと指摘している。入札制、親の存在など[1]の形態を引き継ぐ部分はあるものの、幾つかの点で変容を遂げている。ひとつは入札の対象が、[1]の給付金額の低さ（未落札者一人あたりの掛金の低さ）から利息の高さに変化したことである。給付金額の割引を競うより、支払う利息を競った方が取引金額の規模は大きくなるため、これは利殖目的の色合いが強くなったことの反映と捉えられよう。注目されるのは親の役割の変化である。[1]では救済対象であったのが[2]では世話人・責任者の色合いが強い。[1]ではお金に困っている人が親となったが、[2]では資産があり、もしものとき保証人となれる人が親になるようである。親は子の債務不履行の場合の保証人となるリスクを背負うが、無利子で初回給付を受ける（＝無利子ローンを利用する）メリットもある。しかし信頼されもしものとき責任を取れる人でないと親になれないのだから、比較的資金需要の少ない人が親となる構造である。したがって[1]に比べると親が受ける恩恵は少なくなっている。そしてYさんの事例が表すように、全体的に資金需要が下がると会合の後半で利息がなくなり形骸化し始める。それは[3]へ変容する過渡期と見ることができる。

[3]無利子タノモシが文献に登場するのは2000年代以降である。これはKsさんのパターンである。無利息となり親は存在しない。掛金は最終的にそのまま返ってくるので一見損も徳もしないと思われるが、最初に給付を受けたものにとっては無利子ローンであり、取り番が最後の者はいたずらに流動性を失ったことになる。現在価値を考えても先に給付を受けたもの利得は明らかである。しかしこれは経済学的な解釈であって、実際の人間の損得勘定とは別かもしれない。少額の掛金を毎月かけておけば後でまとまったお金となり返ってくる、というのはいわばヘソクリ作りをサポートしたのと同じであり、庶民的家計感覚からすると、取り番が最後の人にとっても悪くはないのではないだろうか⁵。貯金会という新たな名称もここから来ているのかもしれない。だとするなら90年代には発生

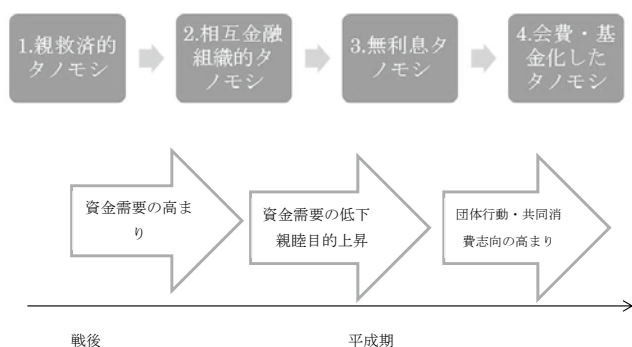
した形態ということになる。籤引形式だと資金需要に応える機能は小さく、利息がなければ利殖目的にも叶わないが、続けるだけで全員が何らかのささやかな得をするのなら、レクリエーションとして親睦目的にかなっているといえる。

[4]会費・基金化したタノモシについては、須山（2003）で指摘されたものや、鄭（2010）の明老会、Yさんの知る親睦目的のグループがこれに当てはまる。これは団体としての活動資金の拠出であって、もはやタノモシとは言えないであろう。外形的にも実質的にもタノモシから離れた形態である。しかし鄭（2010）で紹介された「ひつじ会」の事例は[3]と[4]の中間形態といってよい。ひつじ会は取り番の発想が消えて貯金機能が残し、共同消費に使わなければ掛金が全額年末に戻ってくる。[3]の状態よりさらに個別の資金需要が下がり、無利子ローンという抽選商品の魅力が下がり、かわりに親睦を深める共同消費の価値が大きく評価された結果生じるのだろう。さらに個人貯蓄機能が消滅すると完全に[4]となると考えられる。

こうして眺めると[1]から[4]までライナーな転換経路を見出すことができる（図1.1）。始め親の救済目的であったものが、経済活動の発達に伴い利殖と資金需要を繋ぐ機能に軸足が移り、その過程で親の役割は被救済者から責任者へ転換する。しかし組合などのオフィシャルな庶民金融の発達・整備の進展に伴うタノモシに対する資金需要の低下・あるいは現代化に伴う人間関係の希薄化も背景に、今度は親睦が目的、資金融通がそのための手段という逆転した形態が現れる（逆に、それまでは資金融通が目的、親睦関係が手段だったと定位できる）。そして旅行などの団体活動志向が強かったり、同郷者援助や共済の活動目的が強いものは、持ち回りで受給という要素が消失し、定期掛け込みのみが残り、単純な会費と化すと[4]となる（図1.1）。

5 これは実際一月1000円でこのタイプのタノモシをされていた方から伺った意見である。

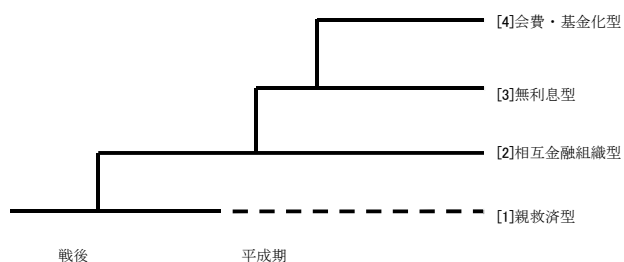
図1.1 タノモシのパターンの転換経路



出所：筆者作成

ただし、新しい形態が発生したからといって以前の形態が消えるわけではない。実際は併存しておりそれを図示すると図1.2のようになるであろう。一つのラインを追っていくと変容が転換となっていくさまを見て取ることができ、全体像で見ると、樹形図上の新たな分岐の派生と捉えることができる。

図1.2 奄美のタノモシ系統図



出所：筆者作成

1.6 タノモシと地域企業団体

さて、これまでの調査では生活者向けのタノモシが中心であった。残念ながら今回の調査では、中小零細企業の運転資金調達手段としてのタノモシの実態解明にまでは手が及ばなかった。そこで最後に、今回の調査を通じて間接的に聞き及んだ話を下敷きにしつつ、ある仮説を提示したいと思う。つまり、生産組合などの地域的企業団体の中にタノモシ的要素が残存しているのではないか、という仮説である。

事業者団体には金融機能を持つものも多い。農協、漁協は言うまでもないが例えば事業協同組合でも法律上、組合員に対する事業資金の貸付業務が認められている（中小企業等協同組合法9条の2第1項第2号）。

筆者が聞き及んだところでは、奄美の某組合では組合員が産品を組合へ納める姿が見られ、それを抵当に組合から融資を受けているではという話がある。伝統的なタノモシには茅などの現物で行うスタイルがあり、そのなかで茅が現金化される局面もあったというが（隣 1993 p.116）、類似したことを行う可能性はないだろうか。こうした団体の資金融通機能は組織内融資だけに留まらない。生産組合等は行政の補助金の受け手となる。しかもそれはある程度安定的に受け取れるものもある。若干の根拠をあげよう。表1.1は九州における伝統的工芸品産業支援補助金の最近4ヵ年採択結果を表したもののだが、過去4年に補助を受けた九州の団体17団体のうち10団体は4年連続で補助を受け（58.8%）、4年のうち3回以上補助を受けた団体は12団体で全体の70.5%を占める。特に2015年に注目すると、この年に採用された11団体のうち、10団体は4年連続で補助を受けている。これを見ると毎年のように補助金を受け取れる団体が多いことが分かるだろう。このように安定的に団体に受給された補助金は当然、補助金事業の執行を通じて組合員企業に配分されるであろう。

そうした団体の融資枠や定期的な補助金は、地縁的關係があり互いに顔を知っていて、かつ比較的小数集団という、タノモシに類似した構成の中で、どう配分されるであろうか。その団体の中の同一企業が連続で受給することは、おそらく好まれないだろう。そうすると、それ避けるような仕組みがあっても不思議ではないと思われる。そこに「持ち回りで一巡する」というタノモシ的方法論が選択される可能性が少なからずあるのではないだろうか。もしそうだとしたら、中小零細企業向け庶民金融としてのタノモシの機能は組合等の近代組織に取って代わられても、そのなかに実は伝統的な庶民金融の名残が残っていたといえるだろう。

しかしながら今回の調査ではそれを検証するまでには至らなかったため、飽くまで仮説として示すにとどめ、その検証は今後の課題としたい。

表1.1 九州の伝統的工芸品産業支援補助金受給団体

○振興計画に基づく事業

2014	2015	2016	2017
博多織工業組合	博多織工業組合	博多織工業組合	博多織工業組合
			八女福島仏壇仏具協同組合
久留米絣協同組合	久留米絣協同組合	久留米絣協同組合	久留米絣協同組合
			小石原焼陶器協同組合
佐賀県陶磁器工業協同組合	佐賀県陶磁器工業協同組合	佐賀県陶磁器工業協同組合	佐賀県陶磁器工業協同組合
三川内陶磁器工業協同組合		三川内陶磁器工業協同組合	三川内陶磁器工業協同組合
			長崎鼈甲組合連合会
小代焼窯元の会	小代焼窯元の会	小代焼窯元の会	小代焼窯元の会
天草陶磁振興協議会	天草陶磁振興協議会	天草陶磁振興協議会	天草陶磁振興協議会
		山鹿灯籠振興会	山鹿灯籠振興会
別府竹製品協同組合	別府竹製品協同組合	別府竹製品協同組合	別府竹製品協同組合
鹿児島県川辺仏壇協同組合		鹿児島県川辺仏壇協同組合	鹿児島県川辺仏壇協同組合
鹿児島県本場大島紬協同組合連合会	鹿児島県本場大島紬協同組合連合会	鹿児島県本場大島紬協同組合連合会	鹿児島県本場大島紬協同組合連合会
鹿児島県薩摩焼協同組合	鹿児島県薩摩焼協同組合	鹿児島県薩摩焼協同組合	鹿児島県薩摩焼協同組合

○共同振興計画・活性化計画・連携活性化計画・支援計画に基づく事業

2014	2015	2016	2017
N P O 法人博多織技能開発養成学校	N P O 法人博多織技能開発養成学校	N P O 法人博多織技能開発養成学校	N P O 法人博多織技能開発養成学校
波佐見焼振興会	波佐見焼振興会	波佐見焼振興会	波佐見焼振興会
伝統的工芸品新商品開発検討委員会	伝統的工芸品新商品開発検討委員会		
WOAM有限責任事業組合			

出所：経済産業省九州経済産業局（2014，2015，2016，2017）より筆者作成

2. クラウドファンディング：フィンテックを利用した新たな庶民金融として

2.1 クラウドファンディングとは

「クラウドファンディング (Crowd Funding)」は、英語の「Crowd (群衆)」と「Funding (資金調達)」を組み合わせた造語であり、個人および企業がインターネット上のプラットフォームを通じて不特定多数の人から資金を調達する仕組みを指す。

「クラウドファンディング」という言葉自体は新しいものが、多数の人たちから資金を調達する仕組みは、昔から存在している原始的なモデルであり、特に新しいものと考えられない。例えば、親戚や友達からお金を集めて店を開くこと、子供の海外留学の学費を親戚や友達からお金を集めることなど、そして、貸し手が各種の形で借り手に返済することもクラウドファンディングのような仕組みと考えられる。

世界的に有名なクラウドファンディングの事例は、「自由の女神」の台座建設のための集金である。1885年、ニューヨークで新聞「ワールド」の発行をしていたジョセフ・ピューリッツァーが、ニューヨーク市民に女神の台座をつくるための資金を寄付するよう呼びかけ、寄付金は10万2,000ドルにも達し女神の台座が作られたが、集められた資金の8割は1ドル以下の寄付によるものだった⁶。

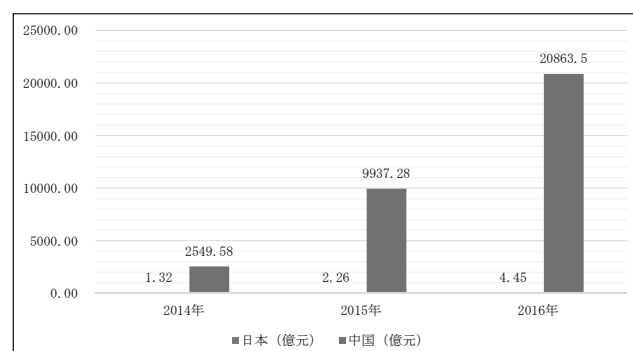
通常、多数から小口の資金を集めるためには、相当な調達コストがかかるが、IT技術によって、プラットフォーム上で情報提供から契約や決済などの手続きが低コストで容易に行われるようになった⁷。従って、クラウドファンディングの登場によって、個人や企業がインターネット上のプラットフォームを通じてほかの人々に資金の提供などの協力を求めることができるようになり、企業や個人の資金調達の難易度が大幅に下がったといえよう。

2.2 日本と中国のクラウドファンディング市場規模の比較

現在のクラウドファンディングの発展はどのような状況であろうか。図2.1は、日中における2014年から

2016年までの融資額規模の推移を示したものである。

図2.1 2014年から2016年日本と中国のクラウドファンディング融資額の比較 (単位:億円)



出所：矢野経済研究所 (2017), 盈燦コンサルティング (2015, 2016), 「網貸之家」 (<http://www.wdzj.com/>) に基づき筆者作成⁸

図2.1のように、クラウドファンディング融資額は2014年から2016年、日本のクラウドファンディングの融資額は約171%, 197%で成長し、中国のクラウドファンディングの融資額は約390%, 210%で成長していたことが分かった。2014年から2015年の成長率の差は大きいですが、2015年から2016年の成長率の差は近づいている。成長率が上昇トレンドか下降トレンドかの違いはあるものの両国とも200%程度の成長率を示しており、クラウドファンディング事業は日本と中国双方にとって大きなポテンシャルを持つ事業である。

しかし、日本と中国のクラウドファンディングの規模は大きく異なる。2014年日本のクラウドファンディング融資額は1.32億円、中国のクラウドファンディング融資額は2549.58億円となり、日本の約1924倍である。2015年、2016年の融資額の差はもっと大きくなり、約4390倍、4688倍になった。

以上より、中国のクラウドファンディング市場規模は大きく、より発達していることが分かる。成長率が下降トレンドなのは市場の成熟度が相対的に高い段階にあることの証左であろう。そうした「クラウドファンディング先進地域」といえる中国のクラウドファン

⁶ Harris, blohm and leimeister (2014) を参照のこと。

⁷ 松尾順介 (2014, p.18) による。

⁸ 2014年から2016年日本のクラウドファンディングの融資額は22.191億円, 37.917億円, 74.551億円であり、2016年12月31日の為替レート「1円=0.0597人民元」を用いて中国元に換算する。

ディングは、どのようなものであろうか。

2.3 現行の中国の主要なクラウドファンディングモデル

クラウドファンディングの貸し手が受けるリターン
の形式によって、現行の中国の主要なクラウドファン
ディングは下表の4種類に分類できる。

表2.1のように、中国のクラウドファンディングは
貸付型、購入型、エクイティ型、寄付型に分類できる。

(1) 貸付型

貸付型は、資金を必要とする個人や企業が資金使途
や金利、返済期間などをプラットフォーム上のプロ
ジェクトとして掲載し、貸し手はプロジェクトの情報
を勘案して投資するものであり⁹、借り手が将来の利
息に合わせて元本を回収するものである。貸付型ク
ラウドファンディングはP2Pファイナンスとも呼ばれ
る。P2Pは元々コンピューター用語Peer to Peerの略
であり、インターネット上の複数の端末間で通信を行
う方式の一つである。コンピューター同士が対等に通
信を行うことが特徴である。その特徴がP2Pファイ
ナンスと似ているためP2Pファイナンスの定義に用いら
れた。

個人や法人がプラットフォームを通じて貸し手から
資金を集め、事業開始、もしくはプロジェクト開始の
ための融資を行う。そして、事前に決めた金利、返済
期間に従って貸し手に返済する。貸付型のクラウド
ファンディングの借り手は、ビジネス目的だけではな

く、結婚資金、自動車購入資金、学費など多種多様な
目的で利用している。

(2) エクイティ型

エクイティ型は、インターネット上のプラット
フォームを通じて、企業が非上場株式を発行すること
によって、多くの人から少額の資金を集め、自社の株
式をリターンとして貸し手に渡すことである。それを
通じて、企業が創立に際する初期エクイティの募集は
できるようになった。

(3) 購入型

購入型は、企画者がまず貸し手の資金をもらい、そ
の後プロジェクトを実施し、そのプロジェクトに関す
るサービスや商品が完成する際に、そのサービスや商
品を貸し手の出資に応じたリターンとして貸し手に提
供されるものである。

企業としては、商品やサービスのイメージを出すこ
とによって、プロジェクトを実施するための資金を得
ると同時に、資金調達の進展状況から市場の反応も見
られる¹⁰。資金調達の成功を条件に商品の製造やサー
ビスの提供を行う点は、ある程度予約販売という形に
似ている。しかし予約販売は、完成した商品が多く、
マーケティングの手段の一つであるが、購入型のクラ
ウドファンディングは、未成熟な製品に関して、自分
のアイデアを貸し手に「共感」を求めている。貸し
手は各プロジェクトに興味があれば、投資するという
仕組みである。また、投資金額の大きさによって、貸
し手へのリターンが異なることもある。購入型のクラ

表2.1 中国のクラウドファンディングの分類

	貸付型	購入型	エクイティ型	寄付型
概念	貸し手が将来の利息に合 わせて元本を回収するも の	貸し手が出資し、それに 応じたリターンとして、 将来サービスや商品を受 け取ることができるもの	企業が非上場株式の発行 によって、多くの人から 少額な資金を集め、自社 の株式をリターンとして 貸し手に渡すこと	主に公益のための寄付で 投資に対して利息や商品 などのリターンがないも の
対価	利息	サービスや商品	自社の株式	なし
例	多種多様なプロジェクト	中小企業による新製品開 発の資金調達、映画製作 のための資金調達など	企業創立に際する初期エ クイティ募集	災害の復興資金の調達な ど

出所:筆者作成

9 竹内英二 (2015, p.5) による。

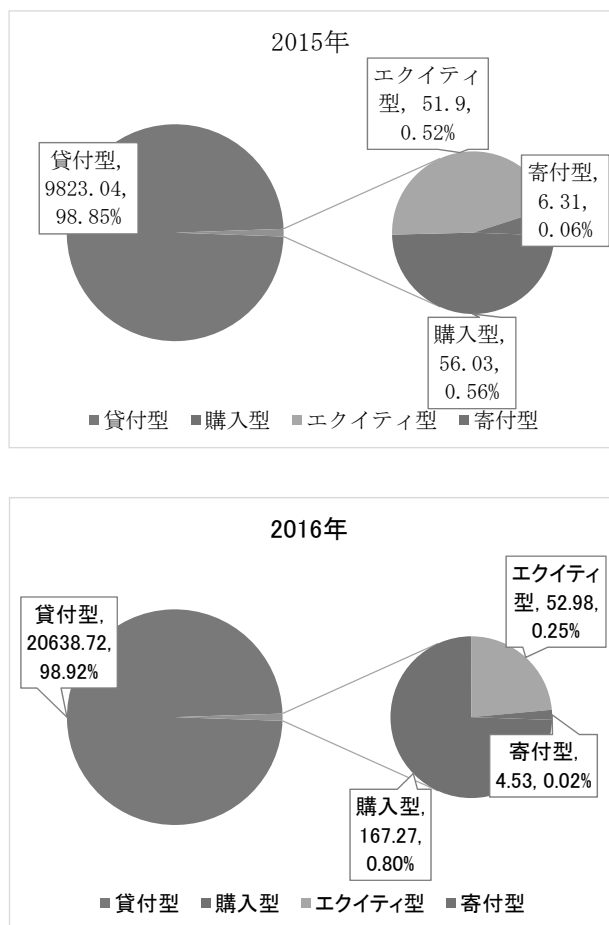
10 三菱東京UFJ銀行 (中国) 有限公司 中国投資銀行部 中国調査室
(2016, p.3) による。

する。最後に、規定した期間に貸し手が借り手からある形のリターンを受け取ることができる（寄付型の場合のリターンはなし）。

2.5 中国のクラウドファンディングの発展状況

前述のように、中国のクラウドファンディングは急速に成長している。2014年から2016年まで、クラウドファンディングの年間融資額は約8.18倍に増加した。クラウドファンディングは4種類あるが、各種類の発展状況はどうなっているのか。次は中国のクラウドファンディングの融資額を類型別で検討する。

図2.3 2015年、2016年類型別で中国のクラウドファンディング融資額（単位:億元）



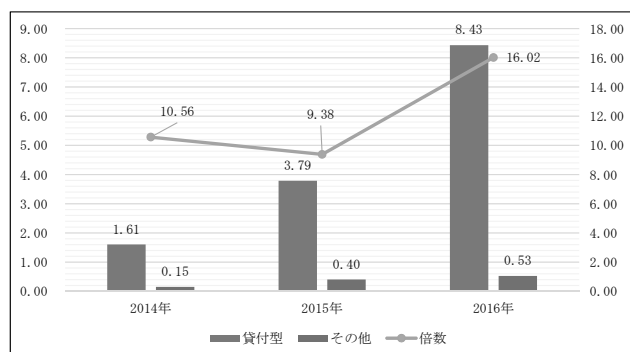
出所：盈燦コンサルティング（2015、2016）のデータに基づき筆者作成

図2.3のように、現在中国のクラウドファンディングは、ほぼ99%が貸付型であり、購入型が二番目、エクイティ型が三番目、寄付型が最後という構成であるが、この三項目の合計でも1%しかすぎない。つま

り、貸付型は現在中国のクラウドファンディングの主流である。そのため、貸付型クラウドファンディングをP2Pファイナンスと呼び、専門的に研究する文献も多くある。

2014年から2016年、貸付型のプラットフォームの数は1575社、2595社、2448社となり、その他のプラットフォーム数は142社、283社、427社となる。従って、2014年から2016年貸付型とその他の一社あたり融資額は下図のように示される。

図2.4 2014年から2016年貸付型とその他の一社あたり融資額（単位:億元）



出所：盈燦コンサルティング（2015、2016）のデータに基づき筆者作成

図2.4から見れば、2014年貸付型の一社あたり融資額がその他の10.56倍となり、2015年が9.38倍に減り、この一年間その他のクラウドファンディングは貸付型より早く成長していることが分かるが、2016年一社あたり融資額が16.02倍となった。

以上のように、現在、中国のクラウドファンディングはほぼ99%が貸付型であり、成長率もとても高いことに対して、その他のクラウドファンディングはまだ極小な部分である。

3. 庶民金融の転換：タノモシとクラウドファンディングのシステム間比較から

3.1 将来の庶民金融の転換可能性

タノモシにもクラウドファンディングにも、一般生活者・零細企業向けの金融の機能がある。そして両者とも銀行とは異なり、貸し手と借り手の直接的な結びつきが存在する。そういう共通点もあるのだが、他方で様々な違いが存在する（表3.1）。

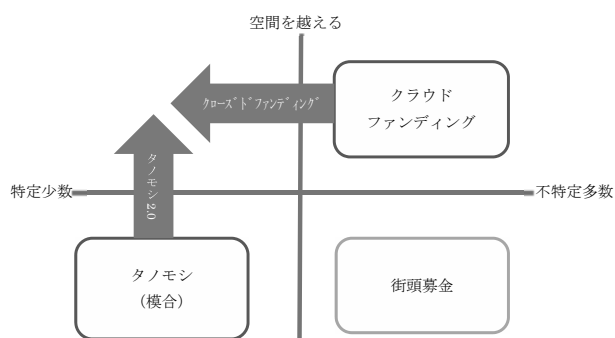
表3.1 タノモシとクラウドファンディングの比較

	タノモシ	クラウドファンディング
対象	特定少数	不特定多数
人間関係	維持必要	維持不要
手段（空間）	面会	インターネット
プロジェクト	なし	あり
報酬	なし	金銭、部品やサービス、なし
信用調査に関し発生する取引コスト	低い	高い

出所：筆者作成

第一に両者に大きく異なっているものは、フィンテックを介したことにより生じたもので、不特定多数か特定少数か、そして空間に縛られるか空間を超えるか、の違いであろう。この関係は図3.1のように整理できるであろう。

図3.1 タノモシとクラウドファンディングの対比



出所：筆者作成

図3.1のように軸をとったとき、見ての通りクラウドファンディングは第Ⅰ象限、タノモシは第Ⅲ象限に位置づけられる。さて4象限図の効用は、空白の象限にしばしばフロンティアを発見できるところにあるが、実は近年「空間を越え、かつ特定少数」である第Ⅱ象限で興味深い動きが出てきた。ひとつは沖縄のタノモシである模合のためのスマートフォン向けアプリが登場である。これはフィンテックと結びついたタノモシが第Ⅲ象限から第Ⅱ象限へ進出する兆しではなかろうか。ただ、その模合アプリ「NICO NICO MOAI」の開発者に普及の現状を問い合わせたところ、まだ試作の段階でありDL数は200、アクティブユー

ザーは20との回答であった。また、その機能もスケジュール共有アプリと類似したもので、現段階ではタノモシにフィンテックを導入するのはまだこれからというところではある。しかし将来、決済機能や入札機能が付加された場合どうなるか、まさしく「空間を超え、かつ特定少数」というサービスが出現することになる（図3.1第Ⅱ象限）—ただし、この場合の特定少数とは個人的な付き合いがある範囲という意味であるが。他方、第Ⅱ象限への接近はクラウドファンディング側からも行われている。それは「Tilt」というサービスで、このアプリは、顔の見える範囲の中で資金を募るプラットフォームを提供していた。しかしこのサービスはairbnbへの吸収にともない現在はサービスを停止している。つまり現状二つともまだ軌道に乗る段階へ到達していないのであるが、アバナシー・モデルを想起すれば新しいジャンルが拓かれる黎明期には様々なデザインが出ては消えていくのはむしろ必然的な通過点だと言うこともできる。

また、特定少数の持つ強みは取引コスト概念から説明が可能である。知らない人より知っている人との取引の方が情報の非対称性が少ないことは言うまでもないが、情報の非対称性、つまり不完全情報は取引コストを生むから、当然情報の非対称性が少ないほど取引コストも少なくなるはずである。たとえば相互金融組織型のタノモシでは、だれでも加入できるわけではなく、親が知人友人のなかから信頼できる相手を選ぶ。これは現実の付き合いや社交のなかで入ってくる情報をあらかじめ持っているから可能な行動である。ところが不特定多数のマッチングするクラウドファンディングではこうはいかない。それゆえ融資希望者にプロジェクトを提出させる。これはいわばスクリーニングであり、債権者側の模索と情報のコストを融資希望者に移転した形である。タノモシにおいてはこのプロセスは不要であり、取引にかかるコストは軽微である。これは情報の非対称性が少ない間柄の強みを活かした簡便な金融方法であるが、この優位性は特定少数だからこそ発揮されるものである。

LINEやfacebookなどの現実の人間関係を土台にしたSNSの成功を思えば、将来的に、上述したようなタノモシに見られる「身内金融」のアドバンテージがフィ

ンテックと結びつき、新たな庶民金融プラットフォームを創出するという現実的な可能性は、少なからずあるのではないだろうか。

3.2 Face to faceの意義の再考

ただ、タノモシは取引コストが低い、という主張には反論があるかも知れない。それは月一回行う会合は取引コストではないのか、というものだ。たしかにこれはコース流の強制と監視のコストに相当するだろう。特に先に落札した者が次から顔を出さなくなった不義理というものである。なので自分の信用力を開示するためにも毎回顔を出さなくてはならない。しかし、見方を変えればこのコストを支払って余りある効果がこのface to faceの会合にはあるとは考えられないだろうか。Face to faceであることが投融資にとって重要であるということを示す有名なエピソードがある。1999年10月、まだベンチャーだった頃のアリババの創業者ジャック・マーは孫正義と会談の機会を得るが、1時間かけて事業の計画を説明する予定が、たったの6分話したところで孫に4000万ドルの出資を提示された、というものである（王・李 2015）。この話は、face to faceの状況を作ることが、投融資にとって無視できない要素であることを示唆しよう。毎月の会合、face to faceのコミュニケーションには、その取引コストに見合うだけの何らかの機能—投融資に関する意思決定などプロセスで決め手となり、取引を円滑にするもの—があるのではないかとすると、face to faceの機能を無視して、空間に拘束されない第Ⅱ象限に移行することはその機能の不保持を含意する。逆に、ビデオ通話などを通じてface to faceがもたらす効果、つまりタノモシが持っていると考えられる強みを取り入れることもできるのではないだろうか。それこそが、第Ⅱ象限金融成功のカギとなるかもしれない。

1節、2節で見たように、タノモシもクラウドファンディングも、社会のニーズに合わせ柔軟に形態を派生させるフレキシビリティを持っている。両システムの強みを取り入れた新システムへの転換—鳥瞰的には分岐・派生となるかも知れないが—の可能性は無視できないのではないだろうか。

謝辞

今回調査をするにあたり、様々な方のご協力を頂きました。唐突な取材にも関わらず快く応じてくれたインフォーマントの方々、株式会社エルニコの金城寛人様、調査方法にアドバイスをくれ、また資料の提供をしてくれた人文社会科学研究科の諸先輩、奄美出身の知り合いを紹介してくれた留学生の蘭さん、大変ありがとうございました。ここに深甚なる謝意を表します。

参考文献

- ・タノモシに関する文献
- 朝日相互銀行・行史編集委員会（編）.（1980）.『朝日相互銀行史』. 株式会社旭相互銀行.
- 伊藤高義.（2017）.「頼母子講」参照先:『日本大百科全書（ニッポニカ）』: <https://kotobank.jp/word/%E9%A0%BC%E6%AF%8D%E5%AD%90%E8%AC%9B-94021%E3.83.87.E3.82.B8.E3.82.BF.E3.83.AB.E5.A4.A7.E8.BE.9E.E6.B3.89>
- 出口剛司.（2001）.「戦後沖縄の文化構造—都市文化の空間的編成—」.『ソシオロギス』, 25, pp.35-55.
- 池上省吾.（2012）.「沖縄の『模合（もあい）』」.『調査季報』, 170, 74.
- 恵原義盛.（1973）.『奄美生活誌』. 山陽社.
- 遠藤綾.（2007）.「模合から見る沖縄社会」.『沖縄フィールド・リサーチ』, pp.20-28.
- 生地陽.（2001）.「模合の履歴—現代沖縄社会におけるうちなーんちゅの人生と模合の機能把握の試み」.『国立歴史民俗博物館研究報告』, 91, pp.745-791.
- 金子邦彦.（2017）.「無尽会社」. 参照先:『日本大百科全書（ニッポニカ）』: <https://kotobank.jp/word/%E7%84%A1%E5%B0%BD%E4%BC%9A%E7%A4%BE-641655>
- 神谷裕司.（1997）.『奄美、もっと知りたい—ガイドブックが書かない奄美の懐』. 南方新社.
- 神田より子, 新谷尚紀, 中込睦子, 福田アジオ, 湯川洋司, 渡邊欣雄（共同編集）.（2000）.『日本民族大辞典 下』. 吉川弘文館.
- 片多順.（2006）.「知念良雄著『模合考（ユレーと

- は)』。『福岡大学研究部論集 A 人文科学編』, 5 (6), pp.81-111.
- 芳即正. (1980). 『薩摩の模合と質屋—南日本庶民金融史—』. 大和学芸図書株式会社.
- 季慶芝. (2015). 「島嶼における地域婦人会の変遷と現状—奄美大島大和村の事例を中心に—」. 鹿児島大学 (博士論文).
- 北島照明. (1972). 「沖縄における模合の実態(1)」. 『商學集志』, 41 (4), pp.89-109.
- 北島照明. (1973). 「沖縄における模合の実態(2)」. 『商學集志』, 43 (1), pp.77-94.
- 経済産業省九州経済産業局. (2014). 「平成26年度「伝統的工芸品産業支援補助金」に係る採択結果について」. 参照先: 経済産業省 九州経済産業局: http://www.kyushu.meti.go.jp/support2/1403/140328_1.html
- 経済産業省九州経済産業局. (2015). 「平成27年度「伝統的工芸品産業支援補助金」1次公募(1次締切分)に係る採択結果について」. 参照先: 経済産業省九州経済産業局: http://www.kyushu.meti.go.jp/support2/1503/150330_2.html
- 経済産業省九州経済産業局. (2016). 「平成28年度「伝統的工芸品産業支援補助金」に係る採択結果について」. 参照先: 経済産業省九州経済産業局: http://www.kyushu.meti.go.jp/support2/1604/160415_1.html
- 経済産業省九州経済産業局. (2017). 「平成29年度「伝統的工芸品産業支援補助金」に係る採択結果について」. 参照先: 経済産業省九州経済産業局: http://www.kyushu.meti.go.jp/support2/1704/170417_1.html
- 国史編纂委員会 (編). (1992). 『国史大辞』(第13巻). 吉川弘文館.
- 須山聡. (2003). 「奄美大島, 名瀬の郷友会—組織の機能と空間的性格—」. 著: 平岡明利 (編), 『離島研究』(ページ: pp.41-54). 海青社.
- 高橋統一. (1989). 「地域社会からみた伝統と近代化—日韓比較の試み—」. 『東洋大学創立100周年記念講演集』, pp.120-128.
- 田島康弘. (1995). 「奄美大島名瀬市における郷友会の実態」. 『鹿児島大学教育学部紀要 人文・社会科学編』, 46, pp.11-30.
- 鄭美愛. (2010). 「奄美大島出身者のUターン移動の特徴と発生要因」. 『地理空間』, pp.77-95.
- 隣重俊. (1993). 『小湊むんがたり—写真にみるふるさと—』. 隣重俊.
- 日本民俗学協会 (編). (2004). 『日本社会民俗辞典 第2巻』. 日本図書センター.
- 野口武徳. (2017). 「催合」. 参照日: 2018年1月18日, 参照先: 『日本大百科全書 (ニッポニカ)』: <https://kotobank.jp/word/%E5%82%AC%E5%90%88-874282%E6%97%A5%E6%9C.AC.E5.A4.A7.E7.99.BE.E7.A7.91.E5.85.A8.E6.9B.B8.28.E3.83.8B.E3.83.83.E3.83.9D.E3.83.8B.E3.82.AB.29>
- 林睦郎, 村上直, 高橋正彦, 鳥海靖 (共同編集). (1991). 『日本史総合辞典』. 東京書籍.
- 森静朗. (2017). 「庶民金融」. 参照先: 『日本大百科全書 (ニッポニカ)』: <https://kotobank.jp/word/%E5%BA%B6%E6%B0%91%E9%87%91%E8%9E%8D-535161>
- ・クラウドファンディングに関する文献
- Harris,P.,I.Blohm,and J.M. Leimeister. (2014). “An empirical taxonomy of crowdfundingintermediaries0.” Paper presented at the International Conference on InformationSystems (ICIS), Auckland, New Zealand.
- 袁毅, 陳亮. (2017). 『中国クラウドファンディング業界発展報告2017』. 上海交通大学出版社.
- 袁毅, 楊勇, 陳亮. (2016). 『中国クラウドファンディング業界発展報告2016』. 上海人民出版社.
- 王家卓, 徐紅偉. (2015). 『2014中国インターネット貸借業界藍皮書』. 清華大学出版社.
- 王家卓, 徐紅偉. (2016). 『2015中国インターネット貸借業界藍皮書』. 清華大学出版社.
- 王家卓, 徐紅偉. (2017). 『2016中国インターネット貸借業界藍皮書』. 清華大学出版社.
- 王利芬, 李翔. (2015). 『Alibaba アリババの野望 世界最大級の「ITの巨人」ジャック・マーの見る未来』. 角川書店.
- 盈燦コンサルティング. (2015). 「2015年全国クラウ

- ドファンディング業界年報」.
- 盈燦コンサルティング. (2016). 「2016年全国クラウドファンディング業界年報」.
- 竹内英二. (2015). 「中小企業やNPOの可能性を広げるクラウドファンディング」. 日本政策金融公庫論集第26号.
- 松尾順介. (2014). 「クラウドファンディングと地域再生」. 『証券経済研究』. 第88号.
- 三菱東京UFJ銀行（中国）有限公司中国投資銀行部中国調査室. (2016). 「中国のクラウドファンディング市場が急伸中～「インターネット+金融」におけるもう一つの試み」. BTMU（China）経済週報第298期.
- 矢野経済研究所. (2017). 「国内クラウドファンディング市場の調査を実施（2017年）-国内クラウドファンディングは貸付型が大きく寄与し、市場規模は拡大基調-」.

平成29年度プロジェクト研究概要

熊 華磊
(プロジェクト研究指導補助)

●前年度プロジェクト研究の課題

「4時間の報告会はあまりにも長かった」。前年度のプロジェクト研究報告会の課題について、報告集の中でこのように書きました。さらに、「単に各報告の時間を削減するのではなく、プログラム全体を見直さないと」とも書きました。ところが、前年度の報告者は4名であるのに対し、今年度は7名と増えました。

昨年度では、4名の報告者に20分ずつ発表時間を設け、さらに10分ずつ質疑応答時間も設けました。4人合わせて120分となりますが、今回たとえ1人の発表時間を15分に、質疑応答を5分に圧縮しても、7人で140分と去年を越えてしまいます。つまり、個別発表のままでは時間短縮の課題をクリアできません。従って、今年度はグループ分けの方向で議論を進めました。

●授業について

前年度は前期からプレセミナーが2回実施され、教員と院生による夏季合宿も行われました。おかげで後期授業がスタートしてからスムーズに共同テーマの決定ができました。

しかし、今年度は報告者が増えることや、留学生たちが夏休み中に帰国した、などの原因で、プレセミナーも合宿も行われることができませんでした。もちろん、私の日程調整が遅れたことも原因の一つであり、反省したいところです。

さて、授業開始してから三週間の議論を経て、ようやくグループ分けの方法や共同テーマ案をあげることができました。詳細について永田邦和先生が巻頭文で書いてありますので、ここでは割愛します。参考として、今年度報告者の分野及び研究テーマについて表1で提示します。今年度は各報告者の研究手法及び研究対象を軸に、「文献班」、「インタビュー班」、「金融班」という三つの班に分けました。以降の授業で、各班は3回ほど中間発表を行い、指導やアドバイスをもらいました。授業のスケジュールに

表1 報告者の分野及び研究テーマ

氏名	分野	研究テーマ
周 倩	文学	村上春樹の作品分析
江 山	政治学	鹿児島戦跡及び戦争記憶・記録について
蔣 奇武		中国共産党の天皇認識について
趙 琳	文化人類学	中国での日本語教育における日本文化の扱い方について
金子 信一	社会心理学	ウェルビーイング概念をめぐる日米比較等
江 駿	経済学	中国のインターネットファイナンスについて
竹下 信一		コミュニティビジネスについて

ついて、表2で提示します。

今年度の授業について、2つの問題点があります。

①グループ内の議論不足

グループ分けしたとはいえ、授業においてはやはり個々人の発表に対する指導や指摘が主な内容となりました。報告者たち自身は課外時間を使って議論し合ったようですが、お互いに対しどのような刺激が与えられるのか、どのような共同性が見い出せるかについての議論がやはり不足と感じました。

②報告会に対する準備不足

また、進捗発表までの授業において、報告者の報告内容を主として指導や指摘が行われてきましたが、最後の結果発表において初めて、報告時間が長すぎたとか、報告内容にメリハリがないとか、共同テーマである「転換」との関連性が薄いなどの問題が発

覚されました。

上記2点の問題を感じつつ、15回の授業を経て、各グループが無事「完成品」を用意でき、報告会に挑みました。

表2 平成29年度プロジェクト研究スケジュール

回	日付	内 容	備 考
1	10/6	オリエンテーション（プロジェクト研究概要説明、昨年度報告例、自己紹介）	
2	10/13	共同テーマ検討①	
3	10/20	共同テーマ検討②	
4	10/27	研究計画発表①	
5	11/3	研究計画発表②	
6	11/17	研究進捗発表①（文献班）	
7	11/24	研究進捗発表①（インタビュー班）	
8	12/1	研究進捗発表①（金融班）	
9	12/8	研究進捗発表②（文献班）	ポスター（案）検討
10	12/15	研究進捗発表②（インタビュー班）	題目、要旨提出
11	12/22	研究進捗発表②（金融班）	ポスター決定・発注
12	1/5	研究結果発表（文献班）	
13	1/19	研究結果発表（インタビュー班）	
14	1/26	研究結果発表（金融班）	報告集原稿提出
15	2/2	報告会に向けての総合検討	
	2/9	12：30～14：00 リハーサル	
	2/10	報告会	

●報告会について

今年度のプロジェクト研究報告会は表3で示したプログラムのとおり行われました。プログラムから分かるように、7人の報告者でありながら、報告会全体の時間が3時間に抑えられ、前年度の課題をある程度クリアできたと思います。

高津研究科長による開会の辞と永田先生による趣旨説明の後、文献班による報告がありました。まず、周倩さんにより、文献班の共通目的について説明が行われてから、3人がそれぞれ自身の研究について13分ほど報告し、最後に江山さんにより、文献班としての成果をまとめました。今まで文献から書き手、或いは書き手から文献という一方的な観点だけ持っている3人ですが、プロジェクト研究を通して、文献と書き手を双方的に見る観点を身につけたところが最も大きな成果だと言えます。文献班の報告に対し、多田蔵人先生はコメントを行いました。3人に対し共通するコメントとして、1種類の文献ではなく、多様な文献による比較研究を行う必要性が上げられました。

続きまして、インタビュー班による報告があり、趙琳さんは先行研究、研究目的等を説明し、金子さんは調査内容や分析考察について報告しました。インタビュー班に対し、尾崎由美子先生はコメントを行いました。研究の視点のみならず、異文化を経験した当事者の視点からも様々な感想や疑問を報告者に投げかけました。その中に、今後の研究を広げるヒントがあると感じられます。

最後に、金融班による報告がありました。竹下さんは奄美大島におけるタノモシ講について報告し、江駿さんは中国におけるクラウドファンディングについて報告しました。2人は同じ庶民金融でありながら、日本の離島地域に継承されている伝統的な金融システムと中国で最近爆発的成長し続けている最新金融システムという鮮明な差異を持つ研究対象に焦点を当てたところがとても興味深かったです。それに対し、コメンテーターの永田先生は、金融システムにおける信頼度の判断やチェックの観点から、2人の報告者が予言している今後の庶民金融の姿に対し疑問を投げかけました。

表3 平成29年度プロジェクト研究報告会プログラム

転換は変容になるのか—過去・現在・未来と国家・民間・個人—		
司会者：石田 智子准教授		
14：00～14：05	開会の辞	人文社会科学研究科長：高津 孝教授
14：05～14：15	趣旨説明	永田 邦和教授
14：15～14：55	文献班報告：文献から読み取る転換期	周 倩・蔣 奇武・江 山
14：55～15：15	コメンテーター論評・来場者質疑応答	コメンテーター：多田 蔵人准教授
15：15～15：25	休憩	
15：25～15：50	インタビュー班報告： 来日前後の日本人イメージの転換 —鹿児島大学中国人留学生を中心に—	趙 琳・金子 信一
15：50～16：10	コメンテーター論評・来場者質疑応答	コメンテーター：尾崎 由美子講師
16：10～16：35	金融班報告： 庶民金融の転換 —タノモシとクラウドファンディング—	竹下 友章・江 駿
16：35～16：55	コメンテーター論評・来場者質疑応答	コメンテーター：永田 邦和教授
16：55～17：00	閉会の辞	桑原 季雄教授



開会の辞：高津 孝研究科長



報告者：蔣 奇武さん



司会者：石田 智子先生



報告者：江 山さん



報告者：周 倩さん



文献班コメンテーター：多田 蔵人先生



報告者：趙 琳さん



報告者：竹下 友章さん



報告者：金子 信一さん



報告者：江 駿さん



インタビュー班コメンテーター：尾崎 由美子先生



金融班コメンテーター：永田 邦和先生



閉会の辞：桑原 季雄先生

伴う「転換」にはまさに「ケンカ」が付き物でしょう。「転換」にまつわる「ケンカ」の中に、新たな研究の広がりが潜んでいると感じられます。この点について、今後機会があれば、報告者たちに伝えたいと思います。

●謝辞

最後ですが、プロジェクト研究を担当する3名の先生方、また、多忙の中、コメンテーターを引き受けてくださった多田先生、尾崎先生にこの場を借りて感謝を申し上げます。

●報告会の課題について

前述したとおり、今回の報告会は時間短縮の課題をクリアできましたが、その反動として、1人あたりの報告時間は12、13分に限定されました。私は当日写真撮影を担当していますが、ほとんどの報告者が聴衆やスクリーンを見る余裕がなく、パソコンの画面をじっと見つめて早口で報告をしたことを気づきました。今後の学会発表などにとって、今回のプロジェクト研究はとてもいい経験になったと思いますが、時間の配分に対する指導における配慮がもう少し必要なのかもしれません。

また、共同テーマである「転換」について、各班はある程度触れることができましたが、掘り下げた議論ができませんでした。それについて、以下のヒントを出したいと思います。

この文章を書いている日の朝、大学に行く車の中でテレビのモーニングショーの天気予報を聞いていました。予報士は1週間の間気温差が大きいことを紹介する際に、「現在はまさに冬から春に変わる『転換期』で、寒気と暖気が上空で激しくケンカしています」と言いました。これを聞いてふっと気がつきました。今回の報告会で紹介された様々な「転換」ですが、ほとんど抵抗なく、スムーズな「転換」として捉えられています。しかし、常に大きな変動を

プロジェクト研究を振り返って

周 倩

去年のプロジェクト研究に、十月入学の私は、先輩たち4人が異なる研究分野から共通テーマを見つけ出すことから、最後の成果発表まで、来年自分が「当事者」としてどうするかを考えながら、「見学者」として参加した。発表の準備段階で、大変だった先輩たちの姿ではあったが、他分野の先生方、先輩方から指導や助言を受けて、それに基づいて修正、発表する。その繰り返しを通して、自己の研究を客観視するチャンスになるというポジティブの面があり（必修だし）、半ば期待の気持ちと不安な気持ちを抱きながら、今年のプロジェクト研究を迎えた。

今回のプロジェクトは七人という多人数のため、個人研究ではなくグループ発表の形になった。従って七人のみならず、グループの共通点も見つけ出さないといけなくなった。何回かの検討で共通テーマ及びグループのテーマがそれぞれ「転換は変容か?」、「文献から読み取る転換期」に決まった。実際の授業においては、発表が一人3回しかなかったため、自分のことで精一杯で、みんなの発表内容も上手く理解できなくて、アドバイスや、コメントが殆どできず、さらに、作品の選定や切り口の発見、加えて共通テーマとの関連性の考慮、これらのことによって自分の研究に取り組む時間が取られて、すごく暗澹たる気持ちになった。

成果発表が無事に終わった今、4か月間に渡ったプロジェクトを振り返って、知らず知らずのうちに、自分の中に変化が生じていることに気づいた。当時、研究が進まず、苦しくて焦る私で、作品は逃げないと丹羽先生の助言で、研究に立ち向かっていくこと、及び、限られた時間内に自分の研究を専門外の方々に簡潔に発表するため、措辞

や今まで気付かなかった着眼点、PPTの作成に関する他分野の先生方、先輩方からのご指摘・ご助言のおかげで、自分の狭い研究世界から少しだけ離れて、自分の研究に対して客観視すること、考えの幅を広げることができるようになっていた。

最後に、熱心にご指導・ご意見を下さった先生方、相談に乗って下さった先輩方、プロジェクト授業の運営などにご尽力くださった熊先生に心から深く感謝申し上げます。

蔣 奇武

研究テーマの異なる学生たちを集め、共通テーマのもとで、各自の研究を進めるというプロジェクト研究に対する最初の印象が「強引性」だった。

今回のプロジェクト研究は、各自の研究がずいぶん異なる7人で構成された。このような複雑な研究背景に、共通テーマを選定することが先ず一苦勞をした。最初に、7人が各自に今着手している研究を順番的に発表し、キーワードを選出した。選ばれたキーワードを中心に、関連性の有無を検討した。全員のキーワードで関連性を見いだす方法が難航しそうになった時に、先生たちに、全員のキーワードでなくても、まず、関連性のあるキーワードをピックアップして、研究グループを作成することで方向修正を進められた。これでようやく「共通テーマ選定の見通し」が立ったという有様だ。

共通テーマ選定に関する話し合いは、各分野の間に「接点」を見いだすことである。このような発見につながる必要な力は、自分の研究を狭い範

囲の視野・視域に留まらず、自ら研究視野を広げ、外に目を向け、他分野の研究者に耳を向け、積極的に他の専門分野と接触・交流をすることである。このことによって、他分野の理論や方法などを自分の研究の中で生かせる可能性を感じると同時に、相手にも刺激を与える相互作用が生じることを今回のプロジェクト研究を通して実感した。

文献班では、3人がそれぞれ、小説や新聞記事そして戦争記録を対象とする研究において、「書き手⇒文献」、「文献⇒書き手」という一方通行的な研究のアプローチが、グループ討論によって、「書き手⇔文献」、「文献⇔書き手」という相互通行的な研究のアプローチに展開した。さらに、文献に対する分析の方法や視点も共有するようになり、今後各自の研究に取り入れ、活かしていく可能性が十分生み出した。

このように、今回のプロジェクト研究に参加することによって、共同研究の重要性に対する認識が高まった。この収穫を今後の研究生活に活かしていきたい。最後に、今回のプロジェクト研究、そして関係者の方々に厚く御礼を申し上げたい。

江 山

今回のプロジェクト研究で、様々なことを学んだ。まずグループ研究は初めてで、テーマはそれぞれであるが、グループのメンバーと交流、議論することによって、ヒントをもらい、視野が広がった。論文を書くにはさらに役に立った。今回うちの文献班は、文献とその書き手との関係について、今までの「書き手⇒文献」「文献⇒書き手」という一方通行的な思考回路をグループの交流を通して、「文献⇔書き手」「書き手⇔文献」という交互通行的な思考回路へと広がった。そのおかげで、面白い研究ができたと思う。

今回私はまず鹿児島市の空襲に関する記録を分析した。第二次世界大戦末期、アメリカ軍による鹿児島市で行われた空襲の文献記録を研究素材と

し、主に出版された文献資料を研究した。70年代の空襲体験者の高齢化をきっかけにして、空襲の記録活動は転換期を迎える。転換期によって、記録の手法や内容は異なると予測される。70年代の転換期を意識しながら、1945年から90年代末期まで、鹿児島市の空襲はどのように記録されているのかを課題とした。結論として公的記録としての『鹿児島県史』や『鹿児島市史』が記録した空襲概要や被害状況は定着した。民間記録は70年代から空襲記録が数多く出版された。内容的に個人の体験記録から、集団の体験記録を出版するようになったと見られる。第二に、記録する特徴は、まず、空襲の概要や被害状況は公的記録を基準に定着したが、数字が不十分という印象は強い。そして、内容的に民間記録は公的記録の補足になった。さらに、空襲体験を記録した人の中で、高齢者が多い。最後に、民間記録から戦争への嫌悪感が見られる。

鹿児島県の戦争記憶の研究にはまだたくさんの課題が残っている。今後ともプロジェクト研究で学んだことを活かし、さらにいい研究ができるように頑張っていきたい。

趙 琳

「転換は変容になるか」という共同テーマの下で、日本語学習歴を持っている中国人留学生来日前後の日本人イメージの転換を調査してみた。来日前の日本語学習で形成された日本人イメージの大きな転換を期待していたが、インタビュー調査の結果からイメージの修正があったものの、大きな転換は見られず来日前のイメージが具体的かつ客観的になったことが明らかになった。日本語教育における「文化」教育とのつながりからさらに研究を深めていきたいと思う。

「政治、文学、文化、金融」など分野の違うテーマを文献の解説、インタビューなどの研究手法で研究を進めるプログラム研究では、戸惑いもあっ

たが刺激も大きかった。プロ研で得た知見を今後の研究活動に活かしたいと考えている。

最後に、ご指導くださった先生方、インタビュー調査を協力してくれた留学生の皆さん、一緒に授業を受けた院生の仲間たちに感謝したいと思う。

金子 信一

私は、博士後期課程から鹿児島大学大学院に入学であったこと、社会人入学であったこと、博士後期課程の多くの在籍者が留学生であったことから、同級生及び先輩方と関係性を築くことが難しい状況にありました。しかし、プロジェクト研究という授業を通じて、法文学部の先生方、先輩、同級生と交流するきっかけになりました。

特に、趙さんとは同じプロジェクト班だったことから、どのような研究を行うかなどについて、最も話しをさせて頂きました。その中で、中国の社会状況など日本との共通と差異に関する話しはとても有意義なものであり、研究が発展していったと感じました。また、これまでの生活では留学生の方々と交流する機会がなかったことから、交流や研究を通して、中国人留学生の方々がどのように日本人を見ているのかについて学べたことが今後の研究や臨床活動でどのように私たちが行動していくべきかということを改めて考える機会になったと感じました。

プロジェクト研究報告会では、どのようにしたら伝わりやすくなるかということを考える機会となりました。これまで、私は心理学の学会において研究発表する機会がありました。その中では、心理学の専門用語などを多用して説明していましたが、プロジェクト研究報告会では、心理学の先生以外にも分野の異なる先生方に研究内容を報告しなければなりませんでした。そのため、私は一般の方にも分かりやすい平易な言葉や図表を作成することがこんなに難しいということを感じられたことが新たな知見となりました。今後は、ど

のように発表すると、もっと分かりやすくなるかということを勉強していこうと思います。

竹下 友章

今年度のプロジェクト研究は、3つの教育上の狙いの説明から始まった。すなわち、①共同研究能力の育成、②新たな研究方法の習得、③学会発表のトレーニング、である。報告が済んだ今、プロ研における自分の活動を振り返り、果たしてこの狙いはどれだけ達成されたかについてこの場を借りて述べたい。

①共同研究能力の育成に関しては、当初、萩野先生から編著的共同研究な方針が提示されていた。つまり、様々な研究者が自分の専門領域を共通テーマに引きつけながらそれぞれの観点で一章を書く、というような、緩やかな共同研究という方向性である。しかし蓋を開けてみると、そういった形とは些か異なっていたと思う。共通テーマは例年通り極めて抽象度が高く、チームテーマについては、「庶民金融」という明確なものを設定できたが、その分自分が現在博士研究で取り組んでいる内容とはかけ離れたものとなった。振り返ると、当初は鹿児島地域という共通項が設定されていたが、それは全員気乗りがしないという雰囲気のもと自然と立ち消えになっていった。今思うとそういう地域限定を付せば、あるいは「多角的な観点から鹿児島を読み解く」というような形で始めに意図された編著的共同研究の方向性にまとめられていたかもしれない。しかし当初の方向性とは異なるものの、共同研究の訓練としてはいい経験だったという実感はある。例えば、我々金融チームの結論部分である、空間軸と特定多寡軸という二軸で四象限図を作り、空白の象限に庶民金融の発展可能性を見出すアイデアは、今回のチームメイト・江さんと教室の中の行なった雑談から出てきたもので、チームワークの中でそのアイデアをブラッシュアップしたものだ。また「取引コスト」

を分析概念として導入したのも、「信用」という、一般的意味と金融論的意味とが違う微妙な用語の使用をどうやったら避けられるか、二人でLINE越しに相談したのが始まりである。これが蓋をあけるとこれが情報経済学的視点での議論に発展させることにつながった。このようにチーム内のコミュニケーションから出た閃きで結論を作れたことには、共同研究のシナジー効果を大いに実感している。無論、こうした結果は、先生方が生煮えのアイデアでもなるべく潰さず、こちらのアイデアを育てようとアドバイスをしてくれたこと負うところは大きい。

②研究方法の習得については明らかに得るものがあった。というのも初めて独力でフィールド調査をするという経験ができたからである。その過程では、先生の紹介の線が途切れ困っているところを、たまたま英語のクラスで出会った学部留学生・蘭くんが奄美出身の友人を持っていたという幸運にも恵まれた。しかしそうはいっても、人づてインフォーマントにたどり着き、アポを取り、インタビューを行う、ということが独力でできたのは、自信につながった。また一歩踏み出して新たなことに挑戦できたのは、数ヶ月後の発表を前提としたプロ研の過程の中に、指導教官による研究指導とは一味違ったプレッシャーがあったからこそだと思われる。

③学会発表のトレーニングについては、一番実効性があったところかもしれない。これは決して自分のプレゼン能力が一定水準に到達したということではないのだが、学会報告に向けた戦略の意識を持つことができた。思うに、学会報告では必ずしも完成度の高い報告を行う必要はない。むしろ学生にとっては、研究途上の半端な内容を巧みにまとめ、そこにフックの効いたサビを盛り込み、それをもって会場にいるその分野のお歴々から助言・指導を引き出し、それに従い研究方針を軌道修正し、投稿論文作成の足がかりとする機会に利用すべきだろうが、プロ研はこういうことを考える切っ掛けとなった。4ヶ月程度プロジェクト研究期間で作成された決して完成度の高くない内容

をどうまとめ、いかに平明・簡潔に伝えるか、研究途上ながらも、「おっ」と思わせる要素をいかに盛り込み、そしてそのように演出するか、というようなことの重要性和、そのための工夫を考えることができた。そのためにはあまり風呂敷を広げすぎず、短期的な着地点を見据えたフォーカシングも重要となる場合があるということも考えさせられた。

当初我々学生にとっては、プロ研は必須単位である以上やむなく取るものであって、博士研究の妨げにならないよう、いかに最小労力で終わらせるかが課題だ、というのが本心であったと思う。しかしこうして思い返すと学生が互いの報告を相互に見ながら、4名の先生によるコメントが受けられる環境というのは教育環境として相当恵まれたセッティングであったように思う。また、毎度の報告で、先生方が学生による発表の要点を短時間で掴み、肯綮に中るコメントを繰り出すのには毎回舌を巻く思いがしたが、こうした能力も研究者を目指すにあたって求められると気付くことができたことも大きな収穫であった。

ご指導くださった萩野先生、永田先生、石田先生、熊先生にはここに衷心より謝意を表したい。

江 駿

半年間のプロジェクト研究を渡り、私たちは大きく成長することができたと思います。最初は正直、博士後期課程の皆様のテーマがそれぞれ違っているのも、ほんとに同じテーマで結びられるかを疑惑しました。しかし、二、三回の討論を通して、今回の大きなテーマ「転換」を決めました。一見関連性がなさそうなテーマでも、実際にちゃんと繋がっていることを分かりました。そして、博士後期課程の皆様が自分の研究テーマの紹介を聞いて、最後に「転換は変容になるのかー過去 現在 未来と国家 民間 個人ー」に確定しました。

私のテーマは「クラウドファンディング」で、

チームメンバーの竹下さんのテーマは「タノモシ」でした。昔から存在した庶民金融と近年急速に発展した庶民金融はどのような繋がりがあるのかを研究しました。最初は、両者が何らかの関連性があるのが、なかなか見つかりませんでした。しかし、毎週の授業を通じて、先生たちと博士後期課程の皆様のアドバイスをいただき、ようやくface to face、人間関係の重要性という点を注目しました。

また、何回のプレゼンを作って、ようやく最終発表会のプレゼンを完成しました。先生たちからも多くのアドバイスをいただき、良いプレゼンはどのように作成するのかを実感しました。特に発表会では、限られた時間の中、自分たちの伝えたいことを伝えることが、いかに難しいかということに改めて気付かされました。今後の研究でも注意して改善すべき点でした。振り返ってみると、大変な日々だったとを感じるが、とても充実しました。最後に、今回のプロジェクト研究の発表及び報告書の作成をご指導、ご助言をいただいた先生方と博士後期課程の皆様に感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

プロジェクト研究とは

「プロジェクト研究」は、地域政策科学専攻の必修科目である。この授業を通して、学生は自己のテーマや調査研究方法を模索し、中間発表を重ねて教員や他の学生からの意見や助言を聞き発表内容を固めながら、他分野の発表を聞き意見を陳述することで、研究者としての力を総合的に高める。

＊プロジェクト研究報告会は、この授業の一環として学生主体でテーマを決め、開催するものです。

平成29年度「プロジェクト研究報告会」概要

総合テーマ：転換は変容になるのか―過去・現在・未来と国家・民間・個人―

開催日時：2018年2月10日(土) 14:00～17:00

会場：郡元キャンパス 総合教育研究棟(文系) 2階201講義室

◇研究報告

周 倩(文化政策コース2年)、蔣 奇武(地域政策コース1年)

江 山(地域政策コース1年)

趙 琳(文化政策コース1年)、金子 信一(地域政策コース1年)

江 駿(地域政策コース1年)、竹下 友章(島嶼政策コース1年)

◇コメンテーター

多田 蔵人(法文学部准教授)

尾崎由美子(グローバルセンター非常勤講師)

永田 邦和(共通教育センター教授)

◇司会

石田 智子(法文学部准教授)

平成29年度「プロジェクト研究」参加一覧

履修院生：

地域政策コース 邵 利軍(2年)、蔣 奇武(1年)、江 山(1年)

金子 信一(1年)、江 駿(1年)

文化政策コース 張 曉娜(2年)、龔 卿民(2年)

周 倩(2年・10月入学)、趙 琳(1年)

島嶼政策コース 竹下 友章(1年)

担当教員：萩野 誠(島嶼政策コース・人文社会科学研究科教授)

永田 邦和(地域政策コース・共通教育センター教授)

石田 智子(文化政策コース・人文社会科学研究科准教授)

指導補助：熊 華磊(人文社会科学研究科特任助教)

プロジェクト研究報告集 第15号

印刷 2018年 3 月20日

発行 2018年 3 月30日

発行所 鹿児島大学大学院人文社会科学研究科

(博士後期課程) 地域政策科学専攻

〒890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元一丁目21番30号

TEL・FAX 099-285-3573

E-mail lehdoc@leh.kagoshima-u.ac.jp

URL http://www.leh.kagoshima-u.ac.jp/wp_leh/?page_id=13129

印刷・製本 濱島印刷株式会社

©2018無断複写・転載を禁ず

ISSN 1882-5648